
副社長 北条明良

立花祐子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

副社長 北条明良

【Zマーク】

Z93310

【作者名】

立花祐子

【あらすじ】

アイドル「北条明良」の結婚から引退後までのお話です。新婚なので、ラブロアなシーンもありますが、許してやって下さい（笑）他サイトにも投稿しています。

出逢い

女優の香月菜々子は撮影を終え、外へ出た。

(あーー…嫌だった…)

今日のベッドシーンの撮影を思い出すとぞっとする。好きでもない男性に、たとえ演技とはいえ抱かれるのは、やはりいい気分じゃない。

『よかつたよー、菜々子ちゃん。』

相手の男優に言われて、菜々子は背中に寒気が走るのを感じた。でも仕事を選べるほど売れてはいない。

女性のマネージャーが車を出して、待っていてくれた。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様。ありがとうございます。」

菜々子はそう言つて、車に乗つた。

……

菜々子は、車の中から、夜の景色を見ていた。

「明日は久しぶりのお休みですねえ。」

車を運転しながら、マネージャーが言つた。

「ええ。ゆつくり寝れるわ。」

「それがいいです。昼も夜もなかつたですもんね。」

「マネージャーもお疲れ様。」

「いえいえ。」

ふと通り過ぎた景色に、見たことのある横顔がさつと映った。橋の上で、川を眺めている。

「マネージャー、止めて…」

「は？ あ、はい。」

マネージャーもその人物を見て、車を止めた。

菜々子は車を降りて、外へ出た。思わず気温の低さに肩をすくめた。何か歌が聞こえたような気がした。

「明良さん…」

菜々子は、川を眺めている北条明良に声をかけた。その瞬間（やだ。どうして下の名前で呼んだのかしら…）と思つた。明良は振り返つた。とたんに、驚いた田中じばりへ固まつたよつて菜々子を見ていたが、

「…菜々子さん。」

と言つて、微笑んだ。

菜々子は、明良に近づきながら言つた。

「どうして、こんなところ…。お独りですか？」

「ええ…。」

「こんな寒い日に、歩かれたんですね？」

「…都え事…ちゅうとこひことあつまし…」

「やつ…」

声をかけたものの、やがてわざわざ明良に声をかけたのか、自分で不思議に思った。

「あの…今、私家に帰るんですが、一緒に車に乗りませんか？家までお送りします。」

「ああ…それはどうも…でも、僕の家はすぐ近くなんですよ。」

「え？ああ、そうでしたか…。」

「お気遣いいただいてすいません。」

「いえ…そんなこと…。」

菜々子はそう言つて、その場を去つた。やはり明良をここに独りで置いておけないような気がした。

「あの…明良さん、お茶でも一緒にいかがですか？」

明良は目を見開いて菜々子を見た。

……

夜とはいえ、喫茶店は大騒ぎになつた。

そりやそうだ。アイドル（といつても、もつとも近いが）の北条明良と女優の香月菜々子がそろつて入ってきたのだから。

マネージャーには、悪いが帰つてもらつことにした。しかし彼女も早めに仕事が終わつてほつとしただらう。

「うーん…私はミルクティーデ。明良さんは？」

「じゃあ…僕も同じものを。」

2人がそう注文すると、ウェイターは顔を赤くしながら頭を下げて、その場を去った。

「…もう少しお時過ぎてたんだ…」

明良が時計を見ながら言った。

「そうですね。」

菜々子がそう答えると、明良は眉に皺を寄せて言った。

「こんな時間まで撮影ですか？」

「まだ早い方ですね。」

「女性をこんな遅くまで働かせるなんて…」

明良がそう言った時、さっきのウェイターがミルクティーを2つ持つてきた。

「ありがとうございます。」

菜々子がそういって、ウェイターは真っ赤になつた。

……

明良と菜々子はミルクティーをそれぞれ一口飲んだ。

「あー…あつたまりますね。」

明良のその言葉に、菜々子はふと思い出した。

「セツセツ… 明良さん、どうしてあんな悪いことにいたんですか？」

明良は苦笑した。

「家で考え事をすると、悪い方に考えがこっちやうんですよ…。だからいつも外で考え事をするんです。特に、川の流れを見ながら考えていると… まず気持ちが落ち着くんですね。」

「… そうなんですか…」

「変な男でしょ？？」

「いえ、そんな… 考え事と言ひのせ恼み事ですか？」

「…ええ…」

明良の顔が少し翳つた。菜々子は（だから、なんとななくほつとけなかつたんだ）と自分の感に自分で感心した。

「… そのお話を聞きしたいけど… ジジジは無理ですね。」

明良はその菜々子の言葉にて、ふと辺りを見渡して笑った。

「ええ。 ジジではちよつとね。」

「あの… 女の方から厚かましいとは思ってますけど… 連絡先… 教えていただけます？」

「え？」

明良が驚いた表情をした。菜々子は顔が火照るのを感じた。

「…「めんなさい。」

「…え… 違うんです。… まさか… 大女優さんにそんなこと言つても

らえるとは思わなくて。」

「大女優なんかじゃありません。」

「僕には大女優さんですよ。…そもそも…お茶に誘つていただけただけでも、緊張するのに。」

菜々子は（そんな風には見えないけど）と思つたが、これは口に出さなかつた。

結局その日、2人は赤外線通信を使って、連絡先を交換した。

……

翌日、昼過ぎに明良からメールが来ていた。

『昨日は楽しかったです。ありがとうございます。』

その一行だけだつた。

菜々子は「…」と件名に入れてから、「私でよければ、昨日の考え方、教えて下さい。」と本文に入れ、返信した。どうしても明良の悩みが気になるのだ。そして、すぐに返信が返ってきた。

『今夜も会いませんか？』

菜々子は胸がはずむのを感じた。

『…か、ゆつくり話せるところで。…でも、どこがいいかな。』

「そうねえ…」

菜々子も困惑した。自分の家はいくらなんでも一度しか会つていな

いのに、招待するわけにもいかないだろう。

『個室があるバーを知っているのですが、そこでいかがですか?』

大胆かなあと思いながらも、菜々子は返信してみた。するとまたすぐには返事が返ってきた。

『それは是非。』

菜々子は思わず声を上げて喜んだ自分に気がついた。

(やだ、いい年をして……)

そう思いながら、会う時間を打ち合せた。

「明良さんも、お休みなのかな……」

それならすぐにでも会いたい気分だが、高鳴る気持ちを必死に抑えた。

「そうだ。何を着て行こう……!」

菜々子は、鼻歌を歌しながら、クローゼットを開いた。

……

「北条さんはもうお越しになっていますよ。」

バーのマスターが、菜々子にそっと耳打ちしてくれた。菜々子がよく独りになりたい時に来る場所だった。マスターは口が堅く、安心

して飲める場所だった。

「ありがと。」

「お飲み物は何を持っていきましょうか？」

「明良さんは何を飲んでるの？」

「オレンジジュースです。」

「じゃあ、私もそれで。」

「わかりました。」

菜々子は個室のカーテンを開いた。

「『めんなさい。私の方が遅くなってしまって…。』

そう言つと、明良が顔を上げ立ちあがつた。スーツを着ていた。ネクタイはなかつたが、何か昨日のラフな雰囲気と違つたので、菜々子はびきつとした。

「いえ…。なんだか気持がはやつて…早めに着いてしまいました。」

「まあ、お上手。」

「そんなことはないですよ。」

明良が照れくさうに言つた。2人は座つた。

よく考えてみれば、菜々子は明良のことを、テレビや新聞でしか知らなかつた。明良もそのはずなのに、どうして昨日は、まるで知り合ひに会つたように、お互い名前で呼びかけたのだろう…。

マスターがオレンジジュースを持つてきた。菜々子は「ありがと」
と言つた。

「あれ？」

明良が不思議そうな顔をした。

「…それは力クテルですか？」

「いえ…ただのオレンジジュースです。」

「…もしかして…僕が飲めないから?」

菜々子は、ためらいがちにうなずいた。

「それは申し訳ないな。…どうぞ、お好きなの飲んでください。その方が、僕は気が楽です。」

「…すいません。」

「あ、いや…謝つてもいい」とは…これは私が飲みますから、どうぞお好きなものを。」

明良にそう言われ、菜々子はマスターにいつもの赤ワインをお願いした。

マスターがうなずいて、カーテンを閉めて出て行つた。

すぐにも明良から話を聞きたいが、マスターがワインを持つてく
るまでできない。

いつもより、時間がゆっくり過ぎているような気がした。

明良は、先に来た飲み物すら一切口をつけていなかつた。今も一緒にワインを待つてゐる。

「どうぞ、先に飲んでください。」

「いえ。待ちますよ。」

「逆に気を遣います。」

「あはは…やり返されましたね。」

明良が笑つた。菜々子は「そんなんもつじや」と下を向いた。
その時、ちょうどワインが来た。

「グラスワインなんですか？」

明良が不思議そうに尋ねた。

「すぐなくなつちゃうじゃないですか。」

「ワインは一気に飲むものじゃないので、大丈夫です。」

「あ、なるほど。」

2人は乾杯した。

(えりこよへ…)

と菜々子は思った。いきなり悩み事を聞くのもはしたない様な気がする。

「今日は、お仕事お休みだつたんですか？」

「ええ。菜々子さんも？」

「はい。久しぶりに。」

「……そうですか…その久しぶりのお休みの時間を取つてしまつて申し訳ない。」

「そんな…いいんです。私もちょっとおしゃべしゃある」口があつて。」

菜々子は思わず言つて「やだ」と言つて、下を向いた。

「…先に聞いてもいいですか？」

明良が少し心配なつに言った。

「ダメです。今日は明良さんのお話を聞きに来たんですから。」

「じゃあ、僕から話したら話してもらえますか？」

「ええ…話します。」

「僕のは…大したことじやないんですよ。」

明良は指でこめかみを搔いて言った。

「お仕事のこと?」

「ええ…体の限界を感じて…。」

明良はダンスを主流とした歌手である。最初はアイドルでデビューしたが、どんどん歌唱力をつけ、今はダンスのある曲よりも、バラードの方が多いかった。

(そのことで悩んでるのかしら)

菜々子はさう思つたが、明良の次の言葉を待つた。

「引退を考えてこらんです。」

「引退…?」

明良は自分の唇に人差し指をあてて「内緒ですよ」と言った。

「それはもちろん…でも、引退なんて早すぎます。」

明良は首を振つた。そしてオレンジジュースを一口飲んだ。

「歌はまだいけそうですが…踊る」とはもう…前に自分がテレビで

踊っているのを見て、情けなくなりました。」

明良の顔に陰りが帯び始めた。本氣で悩んでいた。

「私は明良さんの踊る姿、好きですけど……。」

「僕の踊りを見たことがあるんですか？」

「ありますとも。でも、全て見てるわけではないんですけど……。」

「そりや、そういうですね。……でも、一度でも見てもらえたなら、うれしいです。」

「逆に一度も見たことがない人がいないんじゃありません?」

明良はくすっと笑った。「いつも言つてもひえのとつねしいけど」と呟くよつと言つた。

「とにかく引退はまだ早いと思います。個人的な気持ちですけど。」

菜々子がそう言つと、明良は真顔のままオレンジジュースを一口飲んだ。

「……相澤さんでしたっけ? 親友の……相談されたんですか?」

「先輩にですか……。まだです。」

「親友でしょう? 一番に相談しそうなもんですけど……。」

「そうですね。……でも、いついつ」とは何故か親友でも言えないんですよ。」

「そなんですか……。」

菜々子には理解できなかつた。そもそも親友などいないが。

「まず相澤さんに相談されてから、もう一度考えたらいかがですか?」

「私……結局お役に立てなくて申し訳ないですけど……」

「いえ… 独りで考え込んでいたから、口に出したことであつたせいでしたような気がします。」

明良がそう言って微笑んだ。菜々子はどきりとした。やつその翳りのある顔から笑顔の差が大きい。

「じゃ、今度は菜々子さんのお話。」

「え？ もう？」

「ええ、僕はもう解決しましたよ。」

「…」

（なんだか、拍子抜けだわ～）と思つたが、約束は約束だ。

「…とも言ひにくい話なんですけど…」

「…なんでしょう？」

「…昨日、実は撮影でベッドシーンがあつて…」

「…」

明良の目が見開かれた。菜々子は恥ずかしさに顔が赤くなつた。

「やつぱり…やめます。」

「いえ、駄目です。…それで？」

「…いえ…ただ、嫌なんです。ああいうの…。女優は皆そう思つていると思いますけど…。好きでもない人に、演技とは言え素肌を触れられるのが…嫌で…」

明良はただ黙つて、菜々子を見つめている。さつきよりも機嫌が悪くなつたような表情になつた。そして腹立たしげに、オレンジジュースを飲んだように見えた。

「『めんなさい』…こんな話…」

「いえ…菜々子さんが謝る」とはないですよ。…僕の悩みなんか全然比べものにならない…」

「そんなことはありません。」

明良は首を振った。

「ワインがなくなつてこますね。どうぞ。」

「あ、すこません…」

菜々子はちゅうとほつとして、マスターを呼んだ。マスターはすぐにつつにワインを持つてくれた。

菜々子はすぐにワインを飲んだ。何か気まずい。明良は何も言わないで下を向いている。

「『めんなさい…』

明良がふいに口を開いた。笑顔はない。

菜々子は明良が何を謝ったのか分からず、顔を上げた。

「…僕…女優さんって…仕事を楽しんでおられるのかと思つてしまつた。」

「…え？」

「僕は、歌うのが好きで、踊るのが好きで…この道に入りました。…皆、楽しんで仕事をしているものだと思つてた…。もちろん僕たちだって嫌な事はあるけれど…あなたの今おっしゃつたことに比べれば、まだました…。」

「明良さん…明良さんがそんなに深く考えなくていいんですよ。…仕方がないんです。仕事だから。」

「彼氏は？」

「え？」

菜々子は黙りとした。

「彼氏は？なんでおっしゃってるんですか？」

（彼氏がいたら、2人で会うわけない…）と思つたが、菜々子は平静を裝つて答えた。

「いません。」

「え？…うそでしょ？？」

「いたら、明良さんと2人で会いました。」

結局口に出してしまつた。明良は、さつとしたような顔をした。

「…そういうや、そうですね…。」

「明良さんは？彼女は？」

菜々子は聞き返してみた。もしかすると、こらのかもしれない。

「もちろん、いませんが…」

「うそ！」

「いえ、本当です。」

明良が困つているのが分かつた。ワインが回ってきたこともあつて、菜々子は気が大きくなつていた。

「…本当のこと教えて。」

「本当にこまさんよ。…困ったな…」

明良はオレンジジュースを飲んだ。もつグラスが2つとも空になつてゐる。

「ジュースまだります?」

「え?…ええ…すいません。」

ジュースが来るまで一時休戦状態になつた。何故か、菜々子は不機嫌になつていた。自分でもよくわからない。

オレンジジュースが来た。明良はすぐに一口飲んだ。菜々子は下に向いた。…涙が溢れってきた。

「…菜々子さん?」

「…『じめんなわ』…実は私…泣き上戸なんです。それだけですから

…」

本当の話だった。

明良がそつと手を伸ばして、手のひらを上に向けた。

「?」

菜々子がその手を涙越しに見ていると、明良が「手を」と言つた。菜々子はそつと手を出し、明良の手に自分の手を乗せた。

明良がそつと握つた。

菜々子の手に、再び涙が溢れしてきた。

「僕は…あなたのその悩みに何もしてやれません。…でも…僕でよ

かつたら、辛い時にこうして会こましょ。会つてお互に嫌な事を話して…。こうして手を握ることくらいしかできないけど…。

「…充分です。」

菜々子が泣きながら言つた。明良がほつとしたように微笑んだ。

……

結局、この店の代金は、明良に押し切られる形で払つてもらつた。実は昨日の喫茶店でも払つてもらつている。

「昨日も私から誘つたのに…すいません。」

店を出てから、菜々子は頭を下げる。

「いえ…あなたと会えてよかったです。」

明良が笑顔で言つた。そして、ポケットから車のキーを取りだした。

「家までお送りしましょ。」

「え？」

考へてみれば、明良はアルコールを飲んでいない。

明良は「あ、いや。」と頭を搔いた。

「家の近くまで…です。家の場所…知られたくないですよね。」「そんな…別に構いませんけど…じゃあ、送つていただきます。」

明良が微笑んで、自然に菜々子の背に手を添えた。だが菜々子はびっくりしてしまった。

「あ、そつか…すいません…触られるの嫌でしたね。車の場所があ
つちなん…」

「違うんです。…突然だつたから…。」

明良は笑つて、駐車場に向かつた。キーのボタンを押して、車の口
ツクをはずした。

黒っぽい車だが、詳しきれない菜々子には車種がわからなかつた。

「どうぞ」

助手席のドアを開いて、明良が言つた。

「あつがとつ。」

菜々子が乗つた。

明良はドアを閉めると、さつとあたりを見渡して、運転席に乗つた。

……

車では、菜々子の家まで30分程だつた。

(もつお別れなんだ。)

少しあびしい気がした。

(いいで、家に誘つたら…はしたないかな…)

菜々子はすつと悩んでいた。そのまま帰りたくなかつた。

だが、菜々子の気持ちを無視して、時間は過ぎていく。

あつという間に、家についたような気がする。

とりあえず、マンションの地下駐車場の来客用のところに明良の車を止めてもらった。

「どうも…ありがとうございました。」

菜々子が言った。

「いえ…またメールします。」

「ええ…私からも…」

「じゃ、おやすみなさい。」

「…おやすみなさい。」

ためらいがちに車を降りて、そつとドアを閉めた。すると明良が、運転席から降りた。

「…？」

明良は「マンションに入られるまで見送ります。」と微笑んだ。

「…え？」

「あのドアまで遠いですからね。その間にあなたに向かあつたらいいけない。」

「…それなら…」

菜々子は意を決して言った。

「…部屋まで、守ってください。」

明良の目が見開かれたが、すぐに微笑んだ。

「…信用して下さっているのなら。」

「もちろん…信用します。」

「では、お部屋の前まで…。」

明良はそう言つて運転席のドアを開じると、車のロックをかけた。

…

翌日・

相澤がメッシュセンジャーに向ひつて笑っていた。

「そりや、菜々子さんも災難だったね。」

明良は頭を抱えている。

「恥ずかしいったら、もう…」

明良は昨日、思わぬことで香川菜々子の家に行つたことを相澤に話していた。

しかし、部屋の前で帰るつもりだったのが、結局、菜々子に腕を引つ張られるようにして、入つてしまつた。

問題はそのあとだった。

玄関で、ほぼ酔っぱらつた菜々子にキスをされ、倒れてしまった。

明良は、菜々子のキスで酔つぱらつてしまつたのである。菜々子はグラスワインを4、5杯は飲んでいたようと思つ。

そのままアルコールを飲んだわけではないので、さすがに急性アル

「ホール中毒にはならなかつたが……」

とにかく、救急車を呼ぼうとした菜々子を必死に止めて、ソファーを貸してくれと言つた。

そして「寝室に」と言われたが必死に断り、ソファーに倒れこんだ。目が覚めると、菜々子が自分の胸の上に頭を乗せて、寝ていたという。

「目が覚めて、どうしたんだよ。」

「…いや…菜々子さんが僕の胸の上に頭を乗せていたから…動くわけにも行かなくて…起きるまで待つてました。」

「…手を出さなかつた?」

明良は咳払いをした。

「…こや…その…寝顔があまりに綺麗で…。ついキスを…そしたら目を覚ましてしまつて…」

相澤は笑つた。

「で、どうした?」

「とにかく謝りましたよ。向こうも謝つていたけど…。でも恥ずかしくて、そのまま飛び出してきてしまつたんです。」

「えー? そのまま帰っちゃつたのー?」

相澤が驚いて言つた。

(俺だつたら、そのままやつちやつてるなー…)

などと思つたが、それは口に出せなかつた。

「……だから、ビービーショウとか……。いつから電話しへへへへ……でもお礼へりこ言わなきゃとは思つんですけど……」

明良が頭を抱えているのを見て、相澤は笑った。

「でも、いこなあ……。香月菜々子さんか……。清純派女優が、そこまで大胆になるつてのはなかなかによ。」

「からかわないで下さこよ……。もひ……ビービーショウたらいいのか……」

明良のその動搖ぶりに、相澤は苦笑した。

「やつだなあ……。とにかく電話して……」

と相澤が言つた時、明良の携帯が鳴つた。

「……」

明良は、頭を上げて、携帯を見た。

「……菜々子さん……」

「おつー出の出のーパソコン消すなよー」

「あつちで話します。」

そつと聞いて、明良はヘッドフォンをはずし、携帯を持ったまま立ちあがつた。

「おーい……」話せつて……そつち行くなーー。」

ヘッドフォンから相澤の声が漏れている。

明良は氣にせず、部屋を出で、電話で話した。

「もしもし。」

「明良さん？… よかつた… 電話取つてくれて…」

「今朝はその… すいませんでした。」

「いえ、私の方が… 先に酔つぱらつちやつて… あんなこと…」

「… 呆れたでしょ？？」

明良がやつぱり言つと、菜々子は何も言わなかつた。

（やつぱり呆れたんだ…）

明良はそつ思ひ、ソファーに座りこんだ。

「それはひいらぎの方です…。はしたない女だと思つたでしょ？」「そんな…そんな」とはないですよ…むしり…嬉しかったといふか…なんといふか…」

「…本当に？」

「…はい…本当にです。」

「じゃあ… 今夜も家に来て下さりますか？」

「えつ…？」

明良は思わず立ちあがつていた。

「…いいんですか？」

「ええ… もうお酒は飲まないですから。」

「…いえ… そんな…」

「飲まなくても、明良さんが来てくれたらそれで…」

その後が続かないよつである。明良も顔が熱くなるのを感じていた。

•
•
•
•
•

- 1 -

ほつたらかされていた相澤が、少し不機嫌に明良に聞いた。

一
行くのがよ

卷之三

「… もう、何ががんばっていい野つねです。」

明良は顔を片手で伏せて悩んでいる。

「それなら、今のは、お断りして……」

「...」はかり

相澤が突然大声を出した。明良はひっくりして、ヘッドフォンを取り去り、立ちあがつて両耳を抑えた。

先輩つ……鼓膜が破れたらどうするんですつ……」

カメラの向こうで、相澤が両手を合わせて謝っている。明良は頭を振つて、ヘッドフォンをつけ直した。

「あのな……明良……」

相澤は静かに言った。

「女性の方から家に来てくれつてこいつは、ほぼ100%OKってことだよ。」

「…そりでしようか…」

「嫌だつたら、呼ばねえよ。」

「でも、それとこれとは…」

「それもこれも何のことかわからなーいけどさ。」

相澤がとぼけて言った。

「お前が、例えば何かが壊れて、菜々子さんを襲つたとする…な?」

「…はい…」

明良は両手を田で覆つている。

「その時、菜々子さんにけとびやれるか、投げ飛ばされるか、ドロップキックを受けるか、丸殴められるか、ハイラッシュ…」

「先輩先輩!」

「ん?」

「全部、想像しちゃいますから、プロレス技はやめて下さー。」

「あー…ごめん。とにかく抵抗されてから、ちゃんと謝つて身を引いたらいい。今回ほぼ100%それはないと想つけどな。」

「…」

「菜々子さんが、何も抵抗しなければ、そのまま流れに任せて進んだらいいんだ。」

「…」

なるほど…と明良は思った。せひ相澤は経験豊富だ。

「家に誘われているの」一いちから断るなんて、菜々子さんに一番失礼にあたるんだぞ。」

「…わかりました…」

「それから！花束持つていけ。」

「花束？」

「手ぶらで行くなよ。薔薇の花束を持って行くんだ。古典的な方法だけど、嫌がる女性はまずいないから。」

「あ、は、はい。」

「自分で買うんだぞ。マネージャーに買いに行かせたりするなよ。」

「あ、その方法があった。」

「…また怒鳴られたいか？」「

「いえ！…いいです。」

相澤がくすくすと笑つている。

「あの北条明良が恥をしのんで、薔薇の花を自分で買って持つてくれるんだぞ。そんなうれしいことはない。」

「…先輩、女心もわかるんですね。」

「わかりますとも。」

裏声で、相澤が言つた。

「…じゃ、成功を祈る。がんばりたまえ。帰つてから必ず報告するように。以上！！」

相澤はそう言つて、勝手にメッセンジャーを切つてしまつた。

「え？…ちょっと先輩！…」

相澤のメッセンジャーは、オフラインになつてしまつた。パソコン

の電源を切つてしまつたらしき。
早く準備をしるといふことだらけ。

「……あー……」こんなに緊張するの初めてだ……。」

明良は独りでそつ眩いた。

明良と菜々子はソファーに並んで座り、食後のコーヒーを飲んでいた。

「お料理、お上手ですね。」

「お口に合ひて良かつた……」

明良の言葉に、菜々子はほつとして言つた。明良は、菜々子の手料理を残さず食べててくれた。体つきから見て、さほど食べない様に思つたのだが……。

明良が持つてきた薔薇の花束は、早速花瓶に入れて、ダイニングテーブルに置いている。

玄関を開けた時、薔薇の花束を持つた明良の姿を見て、菜々子は驚いた。

「……その……お詫びです。」

照れ臭そうに、さう言しながら花束を差し出す明良の姿に、菜々子は自分の首筋まで赤くなっているのがわかつた。

「普段は…「コンビニ弁当で…」

明良が頭を搔いた。

「…明良さんが、「コンビニに行くんですか?」

「ええ…そりゃ行きますよ。」

「大騒ぎになります?」

「なりませんよ。逆に気付いてくれる人の方が少ない。」

「そんなこと…」

菜々子は驚いた。

「…本当にです。…はとたど忘れていると困りますよ。」

「…うひ…」

信じない菜々子に、明良は苦笑した。

「…だから、川を見ている時に、あなたが私の名前を呼んでくれた時は…嬉しかった…」

「…」

「まるで知り合このよつて呼びかけてくださいましたね。」

「明良さんだつて…」

「菜々子さんは毎日のよつてテレビで見ていたから…そりや、あなたのことはわかりますよ。」

菜々子は首を振った。

「僕が引退を考えたのは、それもあつたんです。このまま業界から消えてしまつのかな…と漠然と思つていました。それもいっけど、

はつきり引退とこう形を取つた方がいいのか…とか…」

「歌が聞こえたような気がするんですけど…歌つてました?」

「え? 聞こえていたんですか? …小声で歌つていたつもりなんだけ

どな…」

「風に乗つて、少しだけ…。悲しい歌のよつに聞こえましたけど…」

「…」

明良はソファーにもたれて、苦笑した。

「明良ちゃんの歌?」

「いえ…この歌知りませんか?」

そう言つて明良は歌いだした。

スマーナの「モルダウの流れ」だつた。

菜々子も聞いたことはあつたが、歌詞までは知らなかつた。
「モルダウの川の流れは、今も昔もずっと故郷を守つている…」
というような意味だつた。明良の声はテレビで聞くより澄んでいて、
何か心が落ち着くようなそんな声だつた。

「…悲しいメロディーですね。」

菜々子が言つた。明良は少し涙ぐんでいるよつに見えた。

「…歌いながら、僕を守つてくれていた、死んだ姉のこと思い出
していました。」

「あ…血がつながつていないと…。お母さん代わりに明良さん
を育ててくださつたんですね。」

「ええ…。私がアルコールで死にかけたのを『存じだと想つんです
が…』

「もちろん。とても話題になつていましたもの…。その時にお姉さ

「……お話を出て……あの時、相澤さんのために、死のうとなつたんですね。」

明良は恥ずかしそうにした。

「……若かつたんですよ。今思えば、もつと違う方法もあつただろうに。……でも、あの時も死んで構わないと思つてた。」

「あの時も……つて……」

「ああ！すいません……死ぬ気は今はんですよ。……姉とも約束しましたしね。……夢の中で……」

「夢の中？」

「ええ……。ワインを飲んで倒れた時、姉に会つ夢を見たんです。……いつの間にか、僕はどこかの川辺に座つていたんですが、姉が横に座つて……。」

「……」

(三途の川なのかしら……)と菜々子は思つた。

「姉に帰るよついに言われました。僕はもう独りじゃないからと……。そして、人並みに恋をして、人並みに家族を持つて、自分の分まで幸せにならなきゃいけない……と、そう言われたんです。」

「……」

菜々子は何も言葉が出ず、明良の言葉を待つていた。

「……川を見ていた時、その姉の言葉を考えていました。それでその歌を……。いつになつたら、そんな日が来るんだろう……と思ついたら……あなたが……」

明良は菜々子に向いた。

「…一瞬、姉が立っているかと思いました。」

菜々子はとまどつたよひに下を向いた。

「すいません…死んだ人に似ているなんて、嬉しい話じゃないですね。」

「いえ…でも…私じゃお姉さんの代わりにはなりません。」「姉の代わりをしてもらおうだなんて思つていません。…でも、本当に嬉しかった…」

明良が菜々子の手を取つた。菜々子は明良に体を寄せた。明良はそのまま菜々子を抱いて唇を重ねた。

(もしかすると…私はお姉さん呼ばれたのかな…)

菜々子は、明良の長に口づけを受けながらやつと思つた。それなら、あの不思議な感覚の説明がつくような気がした。

…

明良は、自分の腕の中で寝ている菜々子の顔を見つめていた。触れ合つてゐる素肌が気持ちいい。

結局、相澤の言つとおり、流れに任せた形でベッドインとなつた。

明良は、ブランケットを菜々子の肩まで引き上げた。そして、菜々子の体を引き寄せた。

好きでもない男性に素肌を触られるのが嫌だと涙していた。自分で本当に良かつたのだろうか…と明良は思つた。

「明良さん？」

菜々子が目を覚まし明良を見上げた。
明良は微笑んだ。

「おはよひびきやります。…といつても、まだ夜は明けていないようですが…」
「よかつた…」

菜々子が明良の体に密着するように体を寄せた。

「まだ時間はあるのね。」
「ええ。」

明良はふと不安だったことを尋ねた。

「さつや、何か震えていたようだけど…大丈夫ですか？」
「え？」

菜々子は顔を上げて、少し恥ずかしそうにした。

「嬉しかった…体が勝手に…」

明良も少し照れくさくなつた。

「嬉しかった…」
「ええ…本当に好きな人に抱かれたの…久しぶりだったから。」
「ねえ…菜々子さん…」

明良は、菜々子の体を上に上げるようにして、お互の顔を近づけ

た。

「へ? はい?」

「…もうベッドシーンは断つてください。」

「…? …え?」

突然の言葉に、菜々子はとまどった。

「先輩があなたのことを「清純派」だと言つていました。…そう思つていてる人もまだまだいると思います。あなたがそんな無理をしなくて、女優を辞めさせられることはないと私は思います。」

菜々子は下を向いた。

「むしろ、あなたに辞められて困るのは事務所の方でしょ? …もつと自分に自信を持つて…。」

菜々子は潤んだ目で明良を見た。

「はい。これからは断ります。」

明良がほつとした表情をして、菜々子の体を再び抱きしめた。2人は自然に唇を引き結んだ。

* * * * *

身支度を整えた明良が、鏡の前でドライヤーで乾かしたばかりの髪を手ぐしで直していた。

菜々子がそれを見て言った。

「今度、何か整髪剤を買っておきましょーうか？」

「ああ、いえ……」

明良は髪を直しながら、菜々子に振り返った。

「整髪剤だめなんですよ。無香料だとましなんですけど……基本的につけません。」

「整髪剤で酔うの？」

「ええ……困ったことにね。」

明良が苦笑しながら言った。そして髪が整ったのを確認すると、横にこる菜々子の体をすっと抱きしめた。

「実は香水もだめなんですよ。…あなたがつけない人でよかつた。」

菜々子は明良の体の中で目を閉じた。安心感のようなものが体の中から広がっているのがわかる。

「今日、生放送で先輩と音楽番組で踊ります。」「…」

明良の言葉に、菜々子は嬉しそうに明良を見た。しかし明良は表情を暗くした。

「最後かもしれない……。」

「そんなこと言わないで……楽しみにしています。」

「ええ……。」

明良は、菜々子の顔を引き寄せて唇を重ねた。長いキスの後、再び抱き合つた。

「…さりがないな…」

明良がそう言って笑つた。菜々子も笑いながら、

「今夜も来てくれます？」

と聞いた。

「必ず」

明良はそう答えた。

(終)

出逢い（後書き）

お読みいただきありがとうございました（＾＾）

正直、元が夢想なので、なんか時間と会話がたらたらたらたら進んでいるだけで、盛り上がりにはかけるよくな気がします。

でも、ですね…夢想小説つてのは、このたらたらたらたら（延々と続く…）が大切なことです！（？）

たとえば、女性の方ならば、この「菜々子」を自分とするわけです。セリフが決まっているので、自分が言っていると思ってください。で、相手の「明良」は、お好きなタレントさん、俳優さん、芸人さん（ー）を並てはめてください。

…いいですよ…「明良」があなたのために、怒ったり、手を握ってくれたり、車に乗るために、助手席のドアを開けてくれたり、部屋まで送ってくれるんですよー！（笑）

男性の方は、もちろん「明良」になつて、お好きな女優さん、タレントさん、芸人さん（ー）を菜々子にあてはめ、エスコートしてあげてください。…いいですよ…菜々子があなたの行動に涙してくれ、帰りたくないなんて思ってくれ、ひきとめてくれるんですよー！！

ちょっとは楽しめると思つのですが、夢想慣れしていない方は頑張つてください（？）

では、また次回もよろしくお願ひいたします（＾＾）

迷い

「ねえ！明良さん、これ！」

ワンピースを着た菜々子が試着室からしてきた。そして椅子に足を組んで、座つて待つている明良に呼びかけた。

「…よく似合つてますよ。」

「ほんと？」

明良の言葉に菜々子が嬉しそうに答えた。

付き合い始めてひと月経つ。今日は六本木のブティックに2人は来ていた。

店の前は大変なことになつていた。ギャラリーもすごいがレポーターもいる。

(菜々子さん効果だな。)

明良は冷静にそう思つていた。

「買つていい？」

「ええ。」

菜々子は店員に「このワンピースいただきわ」と言つて試着室に入つていった。

店員は「ありがとうございます」と頭を下げていた。

・・・・・

「明良さん、ありがとう…」

喜んでいる菜々子に、明良が微笑む。

ワイドショーでは、そんな2人を冷静に見ている。

明良が最近あまりテレビに出ていなかったため、菜々子と付き合つことは売名行為だと痛烈に批判していた。

対して菜々子は、人気が急上昇している。

それは「今後一切脱がない」と事務所に言つたことから始まった。事務所はそんな菜々子に仕事を回せないと抵抗した。だが菜々子は強気だつた。じゃあ辞める…と言つたのである。

突然菜々子がそう強気になつたのは、もちろん明良のためである。困つたのは事務所の方だつた。

今、菜々子に辞められたら困る。でも、菜々子を脱がせることによつて、今まで思つた以上に稼げていたのは確かである。

事務所は菜々子を説得した。だが菜々子は決して首を縊に振ることはなかつた。元々清純派だつたこともあり、そのことで逆にファンを増やした。

そのうちに事務所も何も言わなくなつた。

…それでも菜々子はさほど喜んではいなかつた。菜々子が忙しくなり、明良との時間が取れなくなつたからである。

明良に会いたくても、会えない日が続くよくなつた。それでも菜々子は、その忙しさに心地よさを感じるよくなつた。

最初は、明良と会えない日を数えていたが、会えなくとも、耐えられるようになつてきていた。

そのうちに明良から連絡が来なくなつた。忙しい菜々子は、そのことにあまり気にすることがなくなつっていた。

明良との絆はどんなことがあっても切れないと想っていたのである。

・・・・・

久しぶりに休みが取れたある日、

菜々子は前の晩から、眠り続けていた。この一週間、ずっと休みがなかつたのだ。

目が覚めた時は、もう夕方になっていた。

「…久しぶりに、よく寝たー！」

菜々子はベッドの上で、伸びをした。

携帯のメールと電話をチェックしたが、何もなかつた。

(これはこれで寂しいけど…)

と思つたが、対して気にはしていなかつた。

すると、突然マネージャーから電話が入つた。

菜々子はさう言つて電話に出た。

「おはようございます。」

「あの…北条さんが…」
「…？明良さんがどうしたの？」

久しぶりに聞いた名前のはずなのに、その時も何も感じなかつた。

「…声が…出ないそ‘うで…」

「声が?…ど‘うこ‘うこと?…」

「…ポリープみたいなのができて‘いるそ‘うなんですが…もしかすると…悪性かもしないと…」

「…?…ガン…つてこと?…」

「…まだ検査の結果が出て‘いないとかで…」

「いつ入院したの?」

「先週の金曜日だとか…」

もうひづ田も経つて‘いる。

「…明良さんのこ‘る病院教えて。」

菜々子は急いでメモを取つた。

・・・・・

菜々子は病院へ急いでタクシーで向かつた。

看護婦から、もう面会時間がほとんどないと言われたが、少しだけでも明良の顔を見たいと思つていた。考えてみれば、かなり久しぶりなような気がする。

「まあ…よかつたわ!」

病室へ向かう菜々子の顔を見て、通りがかつた婦長がうれしそうと言つた。

「?」

「北条さん危なかつたんです。今日田覚めたといひなんですよ。」

「えー?」

「北条さんは特異体质なので麻酔が難しくて…。充分気をつけたんですけど、口間田覚めなくて…」

「…」

「お風呂にやつと田覚めて、ほつとしたといひだつたんです。」

菜々子は婦長に頭を下げるし、急ぐように病室に向かつた。

…

明良がいる病室を覗いた。

ベッドに明良が寝ていて、菜々子がそつと近寄ると、明良の目がすつと開いた。

「明良さん…」

菜々子がそう声をかけると、明良がにっこりと微笑んだ。

そして、自分の喉を指差して、両方の人差し指で、×のマークを現した。

菜々子はうなずいた。声を出せないというサインだとわかった。

明良は、枕元にあつたメモ帳とペンを取つた。

筆談するのだと菜々子は理解した。

『テレビで見てた。…元氣そつて何より。』

メモ帳に、明良がそう書いた。菜々子は「元氣よ」と言つた。

意識不明だったことは知られたくないのだろう…と思い、菜々子は何も言わなかつた。

明良が微笑んで、ペンを動かした。

『これからもがんばって』

と書いた。菜々子は「ええ。ありがと。」と明良に微笑んだ。

『…もうここに来ちゃいけないよ。』

新しい紙に明良がそう書いたのを見て、菜々子は驚いて明良の顔を見た。

その菜々子の表情を見て、明良はただ首を振っている。

「どうして?…どうして来ちゃいけないの?」

菜々子は明良に尋ねた。明良は微笑んで、またメモ帳にペンを走らせた。

『とにかく来ちゃいけない。何も聞かないで。』

「…どうこう」と…

菜々子がぞう震える声で言つと、明良はあわててまたメモにペンを走らせた。

『ガンじゃないのは検査で結果が出たから、大丈夫。』

菜々子がそれを見て、ほつとした顔をした。

『でも、もう来ちゃいけない。』

「明良さん?」

『……今までありがとうございました。』

明良はそうメモに書いた。

「……どうこういって別れるといつこと…」

そう菜々子が言つて、明良が頭を伏せた。

「明良さん…？」

その時、看護婦が病室に入ってきた。

「…すいません。…面会の時間がもう…」

「あ、はい！」「めんなさい。」

菜々子は、ふと明良の顔を見た。明良が微笑んでうなずいた。
菜々子は明良に手を振つた。明良も手を振つている。
菜々子は病室を出た。

・・・・・

数日後、明良の退院を告げるニュースを見た。

「よかつた…。」

菜々子は心からほほつとした。

しかしその日はドラマの撮影があり、明良に連絡を取る時間がどうしても取れなかつた。

・・・・・

夜中…疲れ切っていた菜々子の耳に、携帯の着信音が響いた。

「なあ二ー？こんな夜遅く二。」

菜々子はさう呟いて、携帯を見た。画面には「相澤さん」と出でた。

「一…」

菜々子は電話を取った。

「もしもし？」

「菜々子ちゃん？」

「はい。」

「「めんね。こんな夜中に。今、いいかな…。お昼は仕事がいつも
いだつて聞いたから、なかなか連絡を取れなくて…」

「いえ…私の方こそごめんなさい。」

「あのせ…明良から連絡ない？」

「…ないです。退院前に病院に行つたんですけど…。もう来ないで
いい…って…」

「そうか…」

相澤がその言葉の後、沈黙した。

「相澤さん？」

「明良なんだけど…」

「はい？」

「実は…退院してからも、あこつ声が出なくて…」

「…?…え…?」

菜々子は、初めて体が震えるのを感じた。

「…菜々子ちゃん…明良のところへ顔を出してやつてしまひたくないかな…」

「…仕事が…」

「…そうだよね…。実は明良にも口止めされてたんだ。」「…?」

「ただ…明良のこと…忘れないでほしこんだ。」「…相澤さん…」

「…『めん。それだけ言いたかった。』」「…」

「じゅ、『めんね。』」「…」

相澤の電話が切れた。

…

明良の声がない…。菜々子はぽんやりと、撮影の休憩中にこのことを考えていた。

そして、明良の「モルダウの流れ」を歌う声を思い出した。
その時の明良の声は澄んでいた。何か子守歌を聞くような、優しい声だったことを思い出した。

(明良さんの歌…聞きたいな…)

ふと菜々子は思った。

…

翌日、菜々子は撮影の休憩中に明良にメールをした。

『退院、おめでとう。』

あると、明良からすべに返事が返ってきた。

『あっがとう。』

菜々子はせきとじて、またメールをした。

『まだ声が出なって聞いたけど……』

『うん。よくわからないんだけど……テレビで見てる。頑張ってるね。』

『明良さんも、早く声が出せるようがんばってね。またモルダウ聞かせてね。』

『菜々子さんとね、もう会わない。』

菜々子は明良の言葉に驚いた。『へりつけて』とすぐに返信した。

『たぶんこれからずっと、僕はあなたに向もしてあげられないと思う。それなら僕があなたの傍にいる必要はない。』

「…」

菜々子は返信するのを忘れ、携帯電話を持ったままその文章をぼんやり見ていた。

『声が出来るようになつても、たぶん前のようには歌えないと思つ。僕はもう引退を考えていたし、いい潮時だと思ってる。でも仕事ができない僕が、このまま菜々子さんの傍にいると迷惑をかけてしまうような気がする。』

それを見た菜々子の目に涙があふれた。
続けてまたメールが入つた。

『だから…もう会わない。でも僕は、あなたのファンですつといふから。』

「嫌…」

菜々子はそう呟いたが、もちろん明良には届かない。

『ずっと応援してゐるから。』

「嫌…！」

その後、メールは入つてこなかつた。

……

その後の撮影は散々なものになつた。

菜々子の田はずつと腫れたままで、それをマイクで『まかせても、菜々子自身がセリフを言えなくなつた。結局、翌日撮り直しとなつたのである。

帰りの車の中で、菜々子は何度も明良に電話をした。だが電源が切
られているようなメッセージしか帰つてこなかつた。

「北条さん……つながりませんか？」

マネージャーが運転しながら言つた。

「ええ……」

「心配ですねえ……」

その時、橋にさしかかつた。

「一……」

菜々子はあわてて辺りを見渡した。そしてほつとした顔をすると、

「止めて！」

と言つた。

マネージャーが驚いて、ブレーキを踏んだ。

「先に帰つてて！」

菜々子は車を飛び出した。

……

明良が橋から川を眺めていた。

初めて出会つた時と、全く同じだつた。

菜々子はゆつくりと、明良に近づいた。

明良が菜々子に向いて、田を見開いた。

「…独りで勝手に決めないで。」

菜々子がそうことひと、明良は視線を反らした。

「…明良さんのせいで、あのメールの後の撮影は散々だったのよー。…些に迷惑かけたんだからー。」

菜々子がそう言つと、明良は申し訳なさげに下を向いた。そして、菜々子に体を向けると小さく頭を下げ、背中を向けて歩き出した。

「明良さんー。」

菜々子が追いかけた。

「…えうじて怒らなーのー?」

明良が立ち止つた。

「声が出なくとも…怒りヒメー…どうして…自分でもぐて體臭つわやうのー。」

菜々子はやうに明良の前に回つた。

「手術のことだつてわい…田が覚めなかつたことだつて…どうして…言つてくれなかつたのー?」

明良は田を合わせなごよひこじり、菜々子を避けて再び歩き出す。

「行かないで…」

菜々子が再び明良の前に回り、明良の体を抱きしめた。が、明良は抱き返さない。

そつと菜々子の両腕を取った。そして菜々子の体をゆっくり離した。菜々子が驚いて明良を見上げた。明良は無表情のまま、また菜々子を避けて歩き出した。

(本物にもう…駄目なのね…)

菜々子の瞳に涙が溢れた。

「間に合つた…」

その声に驚いて、菜々子は振り返った。

相澤が車から降りて、明良に向かって走り寄ってきていた。

明良も驚いて立ち止まっている。

「…」

相澤はそつと言いながら明良に駆けより、そのまま両肩を掴むと明良の体を菜々子に向けさせた。そして、明良の肩を背中から抱えたまま言つた。

「いいか。逃げるな…。今、堪えないとい、お前と菜々子ちゃんは一生苦しむことになる。」

明良の目が見開いた。

「お前が独りで苦しむだけなら俺だつて気にしない。お前は慣れるからな。…でも、罪のない菜々子ちゃんまで苦しめることは俺が許さない。」

明良が目を伏せた。菜々子は手を口に当てる、涙を必死に堪えている。

「行け！」

相澤が明良の背中を押した。明良は動かない。

「ほら早く一聲が出ないんだから、自分の気持ちを正直に体で表せー。」

だが、先に動いたのは菜々子の方だった。菜々子はそのまま明良に駆け寄り、明良の体を抱きしめた。

「私にチャンスをちょうだい…」

菜々子のその言葉に、明良の目が再び見開かれた。菜々子は、体を離して明良の顔を見た。

「あなたの心を取り戻す、チャンスをちょうだい。」

明良の目に動搖が浮かんだ。

「あなたの歌が聴きたいの。…あなたの傍で…。」

明良はふと顔を背けて、涙を堪えるような表情をした。

「お願い……！」

菜々子はそう言つて、明良の体をもう一度抱きしめた。明良の体が小刻みに震えてくるのを感じる。明良はやつと、菜々子の頭を抱くようになして、菜々子を抱きしめた。

「……明良さん……」めんね……」

抱き合つた二人の後ろで、相澤がぼーっと大きく息をついた。そして、反対車線にいる車に親指を立てて見せた。それは、菜々子のマネージャーの車だった。

……

1ヶ月後 -

明良は自分の手を枕に、ソファーに寝転んで歌つていた。スマタナの「モルダウの流れ」である。明良の澄んだ声が部屋に静かに広がっている。

歌い終わると、ふと自分の胸元を見た。菜々子が明良の胸の上に頭を乗せて、じつと明良の歌を聴いていたのだ。

「菜々子さん、終わりましたよ。」

「も一回」

「えつー? もう一回?」

明良が聞き返した。

「もう一回」

菜々子が言った。

「菜々子さん、これでもう3回田じやないですか。」

「だって、ずっと聞いていたいんだもん……。」

「僕はレコードじやないんですよ。」

「でももう一回。」

明良ははあっとため息をついた。そして、菜々子の顔を見て微笑んでから、歌いだした。

……明良が菜々子にプロポーズしたのは、それから半月後のことだつた。

(終)

迷い（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました（＾＾）この夢想に出でてるのが、合唱曲「モルダウの流れ」です。皆さん、中学校の時、合唱で歌いませんでしたか？娘は知らないって言つんですよ。

今は歌わないのかな？

旋律はとても悲しいんですが、歌詞はどうやらかといつと、モルダウを讃える歌なんです。

平井多美子さんという方が作詞をされているんですが、いい歌ですよね。

歌詞をそのまま書くと著作権的にだめかなあと思つて、書きませんでした。

現在でも、斎藤和義さんがそのまま歌つていらっしゃったり、交響曲「モルダウ」を元に、藤澤ノリマサさんや、平原綾香さんも詞をつけておられます。メロディーがとても神秘的な感じでいいですよ。よかつたら、聞いてみてください。

ここでは、明良はポリープの手術をするんですが、調べてみてびっくりしました。

今、ポリープの手術つて全身麻酔だそうですね！
で、まず手術後1週間は、しゃべるのも駄目。その後1ヶ月は、普通の会話しか駄目。

それ以降で歌つてもよし…ところ段階があるそうです。

では、次回もよろしくお願ひ致します（＾＾）

玄関のチャイムがなつた。

ダイニングにいた北条明良は、Hプロンをはずしながら、インター
ホンを取つた。
誰かはわかつてゐる。

「玄関開いておますー」

と明良はいつと、すぐにインターホンを置いて、あわてて玄関へ走
つた。

玄関が開き、パーティードレスを着た妻の菜々子の肩をかつぐよつ
にして、菜々子の女性マネージャーが入ってきた。

「あー…すいません。今日も飲み過ぎましたか。」

明良があわてて菜々子の体を抱きとめた。

「…ほら、菜々子さん靴脱いで…」

明良がそう言つと、菜々子は靴を蹴飛ばすようにして脱いだ。

「私も止めたんですけど…」

小柄なマネージャーは笑いながら、菜々子が飛ばした靴を拾つて揃
えながら言つた。

「どんどん飲んじゃうんですよ…すいません。」

「こえ、じりじりやすこません。今日はお疲れ様でした。」

「はいー明日またお昼にね迎えに上がります。」

「わかりました。」

明良は、泥酔している菜々子の体を横抱きにして寝室に向かった。

「菜々子さん、今日は控えめにするつて約束したじゃないですか。」

明良がやつぱり、菜々子は明良の首に両腕を回して「んふふ」と笑った。

「ワインがおいしかったんだもーん」

「僕にはその感覚がわかりませんけどね。」

体质的にアルコールが飲めない明良は、苦笑しながら言った。寝室のドアをひじだけで開け、明良は菜々子をそっとベッドに寝かせた。

「明良ー…」

菜々子が明良の首に腕を巻きつけたまま、離さない。

菜々子はこつもは明良を「わふ」づなで呼ぶのだが、酔い方で呼び方が変わる。

ほろ酔いの時は「明良さん」、ちよつと深酔いの時は「明良ちゃん」、泥酔で、呼び捨てだ。つまり今はかなり酔っていることになる。また甘えん坊になっている。

「なんですか?…もう、菜々子さんの酒臭で、僕まで酔っちゃう…

「いいじゃないー酔っちゃえー…」

「もうー菜々子さんつー…つわ…」

明良は、菜々子に無理せつひつぱらはれて、菜々子の体に覆いかぶさるよつな形になつた。

「お帰りのキスは？」

「はいはい。」

明良は菜々子の脣に、チュッとキスをした。

「そんなのだめー…」

「これ以上は今駄目ですー僕まで酔っちゃつたら、あと誰が…！あ

——つー！」

明良は菜々子を振り払い、慌てて部屋を飛び出して行つた。
残された菜々子は、明良の名前を何度も呼んでいる。
やがて、明良がタンブラーに水を入れて、寝室へ戻つてきた。

「危ない、危ない…鍋かけたままだつたんですよ。明日起きたら、シチュー作つてますから、温めて飲んでくださいよ。」

「えー…明日は明良いないのー？」

「事務所が開設して落ち着くまで、朝ゆづくつするのは、しづらか
無理そうです。」

「ん~…つまんない。」

「そのかわり、こうやって早めに帰つてきていいんじゃないですか。」

「それでもつまんない。」

「菜々子さん！怒りますよ！」

「明良、怒つても怖くないもん。」

「はい。水飲んで。」

明良は、思わず苦笑した。

「うーん、飲ませて……」

「はいはー」

明良はタンブラーの水を、菜々子に口移しで飲ませた。

「んふ。おいしい。」

「それは良かった。」

「ねえ……明良……本当に経営者になつひやうの？」

「……またその話ですか。」

タンブラーをテーブルに置き、寝じろんでいる妻の傍に座りなおして、明良が言った。

「タレント事務所を経営するのは、相澤先輩です。僕は補佐。「副社長でしょうか？」

「だつてえーー！」

菜々子はこきなり起き上がり、再び明良の首に両腕を巻きつけ、明良の体を道連れにベッドへ倒れた。

「菜々子さんっ！だから僕まで酔っちゃうって……」

「だって……明良の歌も踊りも……もう見られなくなるなんて……嫌だもん……」

菜々子は今度は泣き出した。

「あーーー……また始まっちゃった……。」

明良は仰向けに寝て、菜々子の頭を自分の胸に乗せるように抱きしげてた。

めた。

「だから前々から言ってたじゃないですか。三十になつたら、足を折るつて。」

もちろん本当に折るわけではない。踊ることをやめる…つまり現役を引退するという意味だ。それは29歳を過ぎてから、相澤と一緒に考えていたことだつた。

同じ年で、女優の菜々子と結婚したのは先月だが、婚約時にちゃんと説明して納得してくれたはずなのに、これが引退するととなると毎日のように菜々子がぐずるようになつた。

「菜々子も辞める。」

「えつ…? どうして…?」

「菜々子も足折る。」

「菜々子さんは女優さんでしょ? 足折らなくていいです。」

「明良の踊り見たいのーー!」

菜々子はまた泣き出した。明良は困つて菜々子の頭を抱いた。そして突然優しい声で歌いだした。バラードだった。

菜々子は泣くのをやめて、しばらく明良の胸の中で黙つて、明良の歌を聞いていた。

… 明良の歌は終わつた。

「踊りは見せられませんが、いつまでも時々歌は聞かせてあげます。」

… これで我慢して。」

…

… 菜々子さんは女優を辞めたらダメですよ。」

「どうして?」

「事務所が失敗したら、食べさせてもらわなきゃ。」

「……」

菜々子が「何それ！」と笑った。明良は菜々子の頭を抱いて笑った。

「ち、シャワーは……あー……浴びない方がいいですね。明日酔いがさめてから浴びてください。とにかく着替えましょう。」「うーーーん……着替えさせて。」

「はいはい。」

明良は菜々子から離れて、クローゼットから菜々子のワードローブを取りだした。

「えーと…」の服じうなつてんの？はい、うつぶせになつて。「ん~……」

菜々子は言われるともつこした。もう黙りそつだ。

「あ、こんなとこにファスナーがあるのか…。」

明良は菜々子のドレスのファスナーを下ろした。

(終)

引退

相澤と明良の引退番組が始まった。

番組からの希望で、生で歌わなければならない。ただ、ダンス曲は1曲だけにしてもらつた。

「あー…胃が痛い。」

相澤が言つた。明良は苦笑したが、気持ちはわかる。

「飲みすぎですか？」

そうわざと明良が言つと、相澤は「ばか」と言つて、笑つた。

「…お前と一緒に歌うのも最後だな…寂しいよ。」「…」

明良は涙が出そうになつて、ふと横を向いた。

「まだ泣くなよ。」「…わかってますよ。」

明良の声はもう涙声になつていた。

・・・・・

「うわー…若…」

生放送収録中、相澤と明良は自分達が、明良の復活番組で踊っているのを録画で見ていた。もちろん、これはそのまま放送されている。相澤は腕を組んで笑みを浮かべながら見ているが、明良は真剣な表情をしていた。

(…「の頃が一番つまかった…）

そう思っていたのだ。今はとてもじゃないが、こんなにキレのある踊りはできないと思った。百合さんが褒めてくれていた「迫力」もわかるような気がした。

「「」の復活番組の後に…」

司会の女性アナウンサーが言った。

「解散の危機があつて、サプライズをされましたよね。」

「…？」

2人は何も言えなかつた。あれは他局の番組だつたからだ。

「…こちらもサプライズです。ビートオお借りできました。」

相澤と明良は固まつて動かない。

「サプライズのビートオ、どうぞ…」

女子アナウンサーがキューを出した。

すると、相澤がその他局の音楽番組の司会者と話しているところがながれた。

「うわー…」

相澤が思わず声を出している。

明良も真剣な顔で画面を見つめていた。

この時は、もう世間では、明良と相澤がユニットを解散したものと思われていた。だが、2人は秘密裏にこっそり連絡を取り合い、このサプライズの準備をしていたのだ。

曲が始まった。イントロはほとんど相澤のアップだったが、相澤が歌う寸前、カメラが引いて、全体を捉えた。そして明良が何かを投げたのが映った。

「うひじや、まだテレビを見る人はわかっていないな。」

相澤の言葉に、明良がうなづく。しかしそくにカメラが珍しくぶれて、慌てて明良の顔を映した。

「うわ…」

明良は恥ずかしさに、思わず両手で顔を伏せた。かなり緊張した顔で踊っている。

カメラは、動搖する歌手たちや客席も映していた。

「かなり驚かれていますよね。」

司会者が言った。

間奏で、上下で2人が振りを合わせて踊っているところは、正直自

分達でも思わず拍手するくらいぴたりあつていた。

「IJの頃が……一番良かつたなあ……。」

相澤が呟いた。明良はふと下を向いた。もう涙がこぼれそうになつていてる。

最後に2人が抱き合つてゐるシーンには、さすがの相澤も両手で顔を覆つた。

「恥ずかしーーめっちゃ、青春してることつら。」

照れ隠しにそつ言つてゐる。明良も笑つたが、この時に相澤との友情が更に深まつたような気がしてゐた。

・・・・・

実は、今日1曲だけ踊るのは、このサプライズの時の曲だった。

「えー？これ見た後に踊るのー？」

相澤が言つた。明良も手で片目を覆つて、とまどつた表情をしてゐる。

「大丈夫です！大人の踊りを見せて下さい！」

司会者の言葉に、2人は思わず笑つた。

「やう来たか。うん。そつこない」とこしようか。」

と相澤が言い、明良が一つと息をついた。

「スタンバイ、お願ひします！」

司会者にそう言われ、何か2人とも、とぼとぼと歩きだした。スタッフが笑っている。

2人はスタンバイしながらも、お互い「どうする？大丈夫か？」といふような会話を交わした。

サプライズと同じように、相澤が段上、段下に明良がスタンバイし、明良の両隣りには、若いダンサー達が2人ずつスタンバイした。明良は両方のダンサー達に会釈した。ダンサー達も返してくれた。

「明良…いいか？」

相澤がマイクをはずして言った。

「…待つて…」

明良が答えた。…緊張で体が震えてしまっていた。

「泣きながらでもいいから、最後まで踊るう。」

相澤のその言葉に、明良はうなずいた。そして、背中に手をまわしてOKの合図を出した。

相澤がゆっくり2回指を鳴らした。

同時に歌いだす。見事なハーモニーに、思わずスタッフから拍手が起こっていた。

イントロが流れ、2人とダンサーたちが動きだす。

後は、ただ2人とも夢中だった。

若い頃の記憶が何度もフラッシュバックする。

間奏のところは、明良が段上に上がり、2人で並んで踊った。お互いの振りがぴったり合っているのがわかる。

そして、曲も終り、最後のポーズを取った。

明良が上げていた手を、ゆっくりと下ろして目を閉じたとき、相澤が背中から明良を抱きしめてきた。

明良も振り返って、相澤を抱いた。

「俺たち、まだ青春してるよー」

その相澤の泣き声に、明良は泣きながら笑った。

・・・・・

生放送なので、ゆっくり余韻に浸る暇もなく、次の曲となつた。

「お2人とも大丈夫ですか？」

司会者の女性がそう声をかけてくれた。

「体が痛いですが、大丈夫です。」

相澤がそう言つと、スタッフが笑つた。

「の後は1曲ずつ、1人で歌う。

相澤は自分の曲で一番気に入っているのを選んでいた。
しかし明良は…。

相澤の曲が終わり、明良の番となつた。

「明良さんの曲は、私もびっくりしたんですが…合唱曲ですよね。」

明良が少し照れくさそうに笑つた。

「今、スタジオにも合唱団の方にスタンバイしていただいていますが、この曲はどうして?」

「妻と出会つた時に、口づさんでいたんです。死んだ姉のことを思い出しながら…」

「わー…ロマンチックですねえ!」

「曲の内容とは違いますけど…」

明良がそう言つて、頭を搔いた。

「ずっとお好きだったんですか?」

「そうですね…。いつからか覚えていないんですが、辛い時とかに口づさんでいました。でも歌いこなすことがどうしてもできなくて…今日はうまく歌えるか心配です。」

「この曲はいろんな歌手の方が歌詞をつけておられます、合唱曲の平井多美子さんのを使われるんですね。」

「そうです。姉に守られていたことを思い出せるので、この歌詞が

いいですね。」

スタンバイOKのサインが出た。

「では、明良さん、スタンバイお願ひします。」

司会者に言われ、明良は合唱団の前に立つた。そして合唱団に振り返つて、深く頭を下げた。

合唱団と指揮者、オーケストラの団員達がびっくりしたように、明良に頭を下げ返している。

明良は微笑んで「よろしくお願ひします。」と言いつつ、カメラに向いた。

「スタンバイできたようです。では、北条明良さんで「モルダウの流れ」です。」

オーケストラがイントロを流した。

最初の1番は明良が独りで歌つた。オペラ歌手のように声を張るのではなく、語りかけるような歌い方で歌うので、一瞬、スタッフや相澤達が息をのんだのがわかった。

2番から合唱団が入つた。明良の声が負けるかもしれないよう思えたが、明良の歌声は合唱団とは全く違うトーンなので、それが逆に想像以上の効果があつた。

最後は本当は、かなりの盛り上がりを見せて終わる曲だが、一番最後のフレーズは合唱団の方にもお願ひして、静かに歌つてもらつた。

必死に涙を堪える明良の顔がアップになつた。それがわかつたのか、明良は照れくさそうに横を向いた。

そして合唱団とオーケストラに振り返り拍手をした後、頭を下げた。拍手がなかなか止まらなかつた。

「さて、これが本当に最後の曲になるのですが…お2人のユニットのビデオ曲ですよね。」

司会者と相澤達は並んで立つている。

「そうです。」

相澤が答えた。

「びっくりしたんですけど、ビデオ曲はバラードだったんですね。」

「そうそう。明良が首を痛めてた時なので、バラードになつたんです。」

「ちょっとその時のビデオを見てみましょうか。」

「えー？ また比べるのー？」

その相澤の言葉に重なつて、スタッフの笑い声の中、ビデオが回つた。

2人は最初、離れて歌つているが、途中からお互い向き合い、近づきながら歌つた。

「…」れ、姉貴の趣味なんだよな。」

相澤が呟いた。明良は苦笑した。

2人は見つめあって歌っていたが、曲が終わった途端、照れくさそうにさつと顔を背けていた。

2人は思わず笑った。ビデオの中でもスタッフの笑い声が入っている。

「…今日はどうなるんですか？見つめあいます？」
「最後に見つめあととくか。」

相澤がそう明良に言った。明良は笑ってうなずいた。

曲のイントロが流れた。

ビデオの時と全く同じようにして2人は歌った。
見つめあって歌うところは、もはや2人は照れくさそうな笑顔を見せている。

しかし、途中で明良がマイクを下ろした。そしてそのマイクを持った手を額に乗せて泣き出した。

相澤は独りで歌いながら、明良に駆け寄るようにして明良の頭を抱いた。そして歌いながら「ちゃんと歌え」というように、明良の背を叩いている。

明良がやっとマイクを持ち直した。最後まで歌いきると、やっぱり2人は抱き合っていた。

司会者がもらい泣きをしている姿が映った。スタッフが拍手をしている姿も映っている。

すべてが終わつた。

スponサーの紹介のところになつた時、スタッフが明良に何かのサインをした。相澤が先に気づいてそちらを見ると、慌てて明良の肩を叩き、カメラの後ろを指差した。

妻の菜々子が花束を持つて立つていた。

明良は思わず妻に駆け寄つていた。そして抱きしめた。

「明良さん、とつても素敵だつたわ。」

明良に抱きしめられたまま、涙声で菜々子が言つた。

「あらがとう。」

そう言つて、体を離すと、菜々子は持つっていた花束を明良に渡した。受け取つた時、菜々子が明良の涙をハンカチで拭いてくれた。

明良は氣付かなかつたが、その様子もずっと放映されていたのだった。

・ · · ·

「お前のあの時のモルダウがさ……えらい反響あつたんだって。」

まだ準備中の事務所の社長室で、相澤が言つた。事務所は開設していないが、営業だけは始めていた。

「え? そなんですか?」

明良は相澤が入れてくれたコーヒーを飲みながら語った。

「でも…おまえ「モルダウ」レコードイングしない?」

「えつ…?…だつてもう歌わないって。」

「レコードイングだけだよ。お前の最後の曲で、うちの事務所の『ビューチングル』ってわけだ。」

「…」

「頼むよ。合唱団は無理だからさ、小さなオーケストラは用意できるから。」

「わかりました。…社長がやつおつしゃるなら…」

「よつしゃー決まり!」

相澤がガツツポーズをしている。早速、簡易机に座り、電話をかけだした。

「でもなあ…」

その明良の啖きに、相澤があわててかけかけた電話を切つて「どうした?」と言つた。

「あ、いえーなんでもないですー」

明良がそう言いながら、あわててコーヒーを飲む。相澤は不思議そうな表情をしたが、再びブツシユホンを押した。

(本当はそつとしこきたかったんだけどな…)

明良は菜々子と出合つた瞬間を思い出していた。

・・・・・

明良は、モルダウを口ずさみながら、川を見ていた。
すると、突然「明良さん！」という優しい声が聞こえる。
その声に振り向くと姉の姿が見えた。しかしその姿が一瞬にして消
え、菜々子がいた。

…その菜々子の姿はまるで、天使のように輝いて見えた。

(終)

朝 -

携帯電話がなつた。

ベッドの中で、素肌で抱き合つて眠っていた明良と菜々子が同時に「へーーん、じつひーー?」と叫んだ。

「あー…僕のベルです。」

明良がそう言い、枕元にある携帯を手で探った。そして携帯を見つけて取り上げると、開いて電話の相手を見、電話を取った。

「おはようござります。」

明良がわざわざ「まだ寝てたのか。」とこつ相澤の声がした。

「すいません。」

「いや、今日はお前休みにしていたからこつけど…。あ、そつか。お前休みだったわ。」

明良は目を開じたまま、くすくすと笑つた。まだ頭が起きていないが、何か相澤の言つていることがおかしかった。

「いいですよ。じつしました? 先輩。」

「今日お風に俺の部屋に寄つてもうひとつ思つてたんだけど…。いや…俳優部門を作つひとつ思つてゐただけど、どうかなつて。」「つひですか?」

「うん。歌手専門のつもりだっただけど、俳優や女優も育てたいな…
つて、昨夜ふと思いついてや。」

「確かに、今のところ事務所は順調ですけど…俳優さんは、同じ業界でも全く煙が違いますから、未知の部分が多こよつて思つんですが…。」

「なるほどね。…また明日、俺ん所来てよ。明日話やつ。」

「わかりました。」

「ラブ・ラブのところ、悪かつたね。」

「…。」

明良は、驚いて辺りを見渡した。傍には菜々子が自分の胸にしがみついて寝ている。

「…隠しカメラ?…」

思わず明良は呟いた。

・・・・・

「俳優部門ねえ」

菜々子がハムエッグを作りながら、カウンターの前で、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいる明良に言った。

「ええ。急に思いついたそづですよ。」

「何があつたのかしりっ。」

「さあ…」

菜々子は、明良の前に「はい」と言って、出来たてのハムエッグが

乗ったお皿を置いた。

「あつがとわ。」

明良は先に焼いていたトーストをかじった。

「女優の菜々子さんとしては、どう思います？」

「うーん……」

菜々子は、自分の分の卵を焼きながら言った。

「明良さんがわざと言つてたみたいに、煙が違うといえば違うから、最初は大変じゃないかな…。でも、将来的には考えてもいいんじゃない？一つの考えに凝り固まらないで。」「なるほど…。」

明良は新聞を置み、ハムエッグにとりかかつた。

「でも、俳優さんの育て方から勉強しなきゃなりませんね。…営業の仕方だって違うだろ？…」

「明良さんのところに俳優部門が出来たら、私移籍しちゃおつかなあ…」

「えつ…？本当ですか！…？」

「だって…そうなつたら、わざわざ違う事務所にいる必要ないじゃない？」

明良は子供もが喜ぶような顔をした。…が、すぐに頭を抱えた。

「…でも、菜々子さんの事務所が離しますかね…」「そこなのよね…。私も育ててもりつてるから、むげにはできない

んだけど……。」

「でも、前向こうもあえておきますよ。」

「もう明良さんって、最初は渋つてたくせに、げんきんな人ね。」

菜々子のその言葉に、明良が照れくさそうに笑った。

・・・・・

菜々子は匂から、前のドラマで一緒にいた女優同士でランチを食べ
る約束をしていた。

「『』めんね……前々から約束してた日だったから。」

運転している明良に、菜々子が謝った。

「いいですよ。人づきあいもお仕事のうちです。そのかわり、夜、
ご飯一緒に食べに行きましょう。」

「外は嫌……家で食べたいわ……」

明良は笑った。

「そうですか。」

「明良さんが作るビーフシチューが食べたいんだけど……」

「わかりましたよ。作っておきます。」

「ありがとう……。」

菜々子はもう言つて、明良の頬にチュッとキスをした。

レストランから少し手前に、明良は車を止めた。

「1時間程してから、また来てみます。」

「ええ、ありがとうございます。」

「行つてらつしゃい。」

「行つてきます。」

菜々子は車から降りた。

・・・・・

フレンチレストランの個室で、菜々子を入れて4人の女優が集まつていた。

ほぼ同じような年代だが、その中で結婚しているのは菜々子だけだ。バツイチの女優も1人いるが。

菜々子は少々氣まずいような気もしたが、断つたらよけい氣まずくなるので、今日のランチに参加した。

「つらやましいわねえ…」

早速、独身の女優が切りだした。菜々子は肩をすぼめた。

「どうやって知りあうの？あんな素敵な人。」

「…私の場合は、たまたま…。それに私から声をかけましたから。」

「あー…そうだったわね。…やっぱり女から積極的に行つた方がいいのかしら。」

菜々子は（うわー…針のむしるー）と思いながら、スープを飲んだ。

「よく雑誌にあるけど…本当にずっとラブローブなの？」

「いえ……その……」

その時、じつと黙っていたバツイチの女優が急に口を開いた。

「でも、『主人つて、ずっと菜々子さんに敬語よね。名前もせんづけで呼んでるし。』

ちゅうとどづがあるように思つたが、菜々子は急に恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「？」

女優達は、じつじて「」で顔が赤くなるのかわからない。

「じつしたの菜々子さん。」

「い、いえ。何でもないの。」

まさか口に出して言うわけにはいかない。

実は、明良はベッドの中だけ菜々子を呼び捨てにする。それは、結婚前からの明良の癖といつか、ルールといつか……。

「何か気になるわ。」

「気になるわね。」

独身の女優が口々にそつ言い、菜々子を見た。

(絶対に言えない！－！)

菜々子は「まかす」とこした。

「敬語はやめてって最初は言つてたんですけど……せつしても治りないから、もうそのままで…」

「他人行儀じやない？もつと菜々子さんから言つたら…」

そのどげのある言葉に、独身女優達が少し気を遣つ様子を見せた。

「でも、誠実そうじやない。そういうところが…」

「それも、プロダクションの副社長さんですものね。」

菜々子は話題が変わつて、ほつとした。

「でもこいつなるかわかりませんし…気を抜けないわ。」

「そうよね…」

菜々子の言葉に、独身女優達がうなずいていた。
バツイチの女優は相変わらず、機嫌が悪いようだ。

結局、大した話題もなく、女優達は解散することになった。
レストランを出たところで手を振りあつて別れた。
その時、反対側の車線に夫の車が止まるのが見えた。

菜々子は道路を渡つて車に駆け寄つた。明良は助手席のドアを開けて待つている。

「ありがとう。明良さん。」

「楽しかったですか？」

「え、ええ…」

明良はドアを閉め、運転席に回つた。

菜々子はバツイチの女優がじっとこちらを見ているのに気付いた。

(一)

明良は気付いていないうちだが、すっと車を発進させた。
菜々子はほつと息をついた。

明良は運転しながら尋ねた。

「女優さん達ってどんな話をするんですか？」

「……」

「？…菜々子さん？」

明良は菜々子の「元気がない」とに気付いた。

「どうしたんです？何かあつたんですか？」

菜々子は、はつとしたように明良を見た。

「別に…何でもないの…。…その…明良さんが私に敬語だから、他人行儀だって言われて…。」

明良が笑った。

「そうですか。そう言われてもね…。僕の癖ですか。」

「いいの。…やうじやない時もあるから…。」

菜々子がそう言つて、下を向いた。明良も顔が赤くなつている。

・・・・・

家に着くと、ビーフシチューのいい香りがした。

明良はキッチンに入つて、止めていたシチューの火をつけた。

「あと2時間は煮込まないとな…。菜々子さん、ドーハー淹れましょつか？」

「お願い…」

と菜々子は黙つてから、慌てて言い直した。

「…いいわ。自分で淹れるから。」

「?…」

（何か様子がおかしいな…）と明良は思った。
菜々子は明良が自分を見ていることに気が付いて、『まかすよつ』と言つた。

「ちょっと…着替えてくる。」

「ええ。」

菜々子は、リビングを出て行つた。

・・・・・

明良は時々シチューの具合を見ながら、菜々子が戻つてくるのを待つていた。

しかし、30分も経つのに菜々子がリビングへ戻つてこない。

明良は不安になつて、シチューの火を止め、クローゼット部屋に向かつた。

そしてクローゼット部屋のドアをノックした。

「菜々子さん……どうしたんですか？」

返事がない。

「開けますよ。」

やつぱり、やつと開けてみたが、菜々子はいなかつた。

「…？」

明良は寝室へ行つてみた。そして寝室のドアを開けた。

「…菜々子さん…もう…びっくりせなこで下を…」

「…」

菜々子は着替えもせず、ベッドにうつ伏せになつて寝ていた。

寝ているといつても、寝ころんでいるだけだが……。

明良が、そつと隣に座ると、菜々子は明良とは逆の方に顔を向けた。

「菜々子さん？…何を怒つてこらんのです？」

「怒つてなんかない！」

「怒つてるじゃないですか…」

「…ちよつと考え方してから、出て行つて…」

「…わかりました。」

明良は菜々子が心配だったが、ベッドから立ち上がりドアのノブに手をかけた。

「…待つて…」

「？」

菜々子のその涙声に、明良は思わず振り返った。
すると、二つの間にか起きていた菜々子が明良の体にしがみついて
いた。

「…菜々子さん…？」

菜々子は泣いていた。

明良は訳がわからぬじが、とりあえず菜々子を横抱きにして、もう
一度ベッドにそっと寝かせた。

そして菜々子に寄り添いつゝようにして、体を横にした。

「…何があつたなんですか？」

菜々子はまた明良の体にしがみついてきた。明良はそのまま菜々子
の体を抱きしめた。

「ちやんと説明してくれなきゃ、わからないじゃないですか。」

「…明良さん…私…明良さん」とつて…必要なのかしり…」

「…?…どうしてそんなこと…必要に決まつてこるじゃないですか
…」

「…」

思わぬ菜々子の言葉に、明良は動搖した。

女優達に何か言われたのだらうか…と思つた。

「何か言われたなんですか？」

そう菜々子を抱いたまま尋ねると、菜々子がやつと話しおこした。

菜々子はバツイチの女優に「できるだけ早く女優を辞めなさい」と言わされたのだった。

その女優は、自分が女優を続けているために、離婚したのだという。家の用事もする時間がなく、主人とゆっくり時間を過ごすこともできず、とうとう主人の方が我慢できなくなつて、離婚をせられたらしい。

「私も彼女みたいに、明良さんに何もしてないって…思つたの…。」

「！？ 菜々子さん…」

「今日だって…当たり前みたいに車で送つてもうつて、晩御飯まで作らせて…迎えに来させて…私ももしかすると…愛想つかせられるんじゃないかって。」

明良は泣きながら言つて、首を振つた。

「車で送り迎えするのは僕が勝手にやつていいだけだし、晩御飯だつて僕の作る料理が食べたいって言われたらうれしいから、喜んで作ります。そんなことで愛想なんか尽かしませんよ。」

明良は菜々子の体をそっと離して上を向かせると、菜々子の涙を指でぬぐつた。

「それに、幸せの基準は人それだと僕は思うんですけど、その御主人はきっと奥さんに行くくしてもらうのが、幸せだったんだでしょう。僕は逆にいくされると肩身が狭くてたまらない…。」

「明良さん…」

「だから…心配しないで…。」

菜々子は、やつと微笑んで明良を見た。

明良はほつとしたように、菜々子に微笑み返したが、ふと真顔にな

つて仰向けになつた。

「……でも……時々考える時があります。結婚といつ形を取つてよかつたかどうか……」

「……明良さん……」

今度は菜々子が、体を起して明良を見た。

「……僕は結婚して、あなたと家族になるのを望んだ……。姉が16歳の時に死んで、それから今まで家族がいなかつたから……。だからあなたと家族になれたことに、幸せを感じています。」

菜々子の目から涙がこぼれた。明良は、天井を見たまま言つた。

「でも……結婚したために、菜々子さんの仕事が減つたような気がするんです。そのことが申し訳ないな……つて。」

菜々子は首を振つた。明良は菜々子を見た。

「……だから罪滅ぼしといつのもなんですが、できるだけ菜々子さんの言うとおりにしたいと思つてゐるんです。あなたがビーフシチューを食べたいって言つたら作るし、どこかへ行きたいっていついたら、連れて行つてあげる。僕も仕事がありますから、出来ないこともありますが、出来なかつたら出来ないとはつきり言つります。でも出来る限りのことます。……それも僕の幸せです。」

菜々子は涙を堪えるようにして、明良の胸に自分の頭を乗せた。明良はその菜々子の頭を抱いた。

「……女優も辞めなくていいですよ。僕は菜々子さんのファンですか

ら、あなたがテレビから消えてしまつのは寂しいんです。

「…ありがと…明良さん。」

明良は体を起して、今度は自分がかぶさるよつに菜々子を仰向けにした。

「じゃ今度は僕から聞きます。…菜々子ちゃんは今幸せですか?」

菜々子がうなずいた。明良は首をかしげた。

「声に出して。」

「…幸せ…」

その菜々子の言葉に、明良は微笑んで菜々子に軽くキスをした。

・・・・・

翌日 夜 -

「ただいまー」

夫の声が玄関から聞こえた。キッチンにいた菜々子はあわてて玄関に向かつた。そして「おかえりー」と言いながら、明良に向かつて飛んだ。

明良が驚いて、菜々子の体を横抱きにした状態で受け止めた。

「今日、ロールキャベツ作つたの。」

「そ、そつ…」

夫の様子が少しおかしいので、ふと明良の肩越しに後ろを見ると、

相澤が茫然として立っていた。

「ありー！相澤さん…」

「俺、また別の日に来るわ。」

相澤がそう言って、慌てて玄関を出て行つた。

「先輩！…」

明良が驚いて、菜々子を玄関に立たせると、

「先輩の分もある？」

と聞いた。菜々子がOKのサインを出すと、持っていたビジネスバッグを菜々子に押しつけ、「先輩！」と言いながら、慌てて玄関を出て行つた。

「あつ！火を止めてない！…」

菜々子は慌ててキッチンへ走つた。

(終)

「明良さんー早くーー！」

玄関で、ドレスアップした妻の菜々子が明良を呼んだ。

「待つて！ガス栓止めなきゃー！」

その明良の声に、一緒に玄関にいたマネージャーが、ついくすくすと笑ってしまった。

菜々子が笑いながら言った。

「明良さんていつもこいつなのよ。独り暮らししてた男の人ってみんなこうかしら？」

「副社長は特別だと思いますよ。」

「そうよねー」

そう2人でクスクス笑っていると、タキシードを着た明良がやっと現れた。

「ごめん。遅くなつて。」

「はーーおまじないやつてー！」

菜々子がそう言つて、肩にかけているストールをすつと下げ、夫に背を向けた。

「え？今日は僕も一緒に行くから大丈夫じゃない？」
「だめーやつてー！」

明良は苦笑して、菜々子の両肩にそっと手を乗せ、菜々子の首筋にキスをした。

「これでいいですか？」

明良がそうじうと、菜々子は「ありがとうー。」と言つて夫に向いた。このおまじないは、菜々子が口説かれないという効果があるというが、実際にはどうかわからない。

元々は、独りでパーティーに行くことが多い女優の菜々子を、明良が見送る時に唇にキスができる（口紅がとれてしまう）ため、咄嗟に妻の後ろから首筋にキスをしたことが始まりだつた。

菜々子が言うには、その日に限つて、菜々子を口説く男が全くいなかつたらしい。（実は結婚してすぐだつたため、皆、控えたものと思われる。）それから、肩を出すようなドレスを着る日は、おまじないと称して、首筋にキスすることになつたのである。

マネージャーは、この夫婦の仲睦まじさにはいつも当てられっぱなしである。最近は慣れたが。

……

パーティー会場につくと、もうかなりのゲストが来ていた。今回は映画監督の古希を祝う立食パーティーなので、大物俳優、女優等、芸能人のほとんどが集まつているともいえる。明良が呼ばれたのは、菜々子の夫であるといふこともあるが、相澤が事務所を立ち上げた時に、一番に主題歌の仕事を回してくれた大恩人でもあつた。もうすぐ相澤も来るはずである。

「明良さん……香水の匂い……大丈夫？ 酔わない？」

菜々子が心配そうに明良に尋ねた。

明良は特異体質で、アルコール、睡眠薬、香料に極度に弱い。整髪料や香水の匂いでも酔ってしまうので、こういったパーティーはなるべく避けるようにしているのだが、今回はそういうかなかった。

「会場がこれだけ広いから、大丈夫ですよ。
「気分が悪くなったら言ってね。」

明良は、妻の腰に手を回して引き寄せる所作をして「ありがとう」と言った。

…この2人の様子を、後ろのテーブルにいた、若い新人アイドルがじっと見ている。最近売れ始めたアイドルの少年だった。

(…なんか、むかつく…。)

少年は、明良も菜々子も知らなかつたが、菜々子が会場に入ってきた時、一目ぼれのようなショックを受けたのだった。しかし、隣にいる明良が夫であることを知ると、急速に気持ちが冷めてしまった。それでもやはり菜々子の美しさはまだ少年の心を捉えていた。明良がいわゆるハンサムなことも、更に少年を「ムカつかせて」いた。

…

パーティーが始まった。

監督の挨拶、主賓の挨拶、各有名人のお祝い等が何事もなく進んでいき、やつと乾杯となつた。

乾杯が終わると、ゲスト達は各々テーブルを離れて、挨拶に動き出した。監督もそれぞののテーブルに回っている。

(あいつ、お酒飲めないんだ。)

少年は、明良の持っているグラスを見てふと思つた。

（飲んだら、どうなるのかな… 実はすぐ酒癖悪かつたりして…）

もちろん少年のこれまでの経験にアルコール中毒などといふ文字はない。

少年はにやりと笑つて、いたずらの機会を窺うこととした。

■ ■ ■ ■ ■

監督が明良達のテーブルに回ってきた。

昭良と葉々子は玄関を出る。「川は置いて、豊贊は体を向いた。そして「おめでとう」それこます。」と頭を下げる。

「今日は来てくれてありがとう。明良君、具合は大丈夫かい？香水の匂いがすごいけど…。」

明良の体質を知っている監督が言った。

「大丈夫です。すいません。お気遣いいただきました。」

明良が頭を下げた。

「いやいや……無理を重つてすまなかつたね。……菜々子さん、幸せそうだね。」

菜々子は顔を赤くして「ありがとうございます。」と頭を下げた。

「相澤君は？」

監督が辺りを見渡して言った。明良と菜々子はびっくりして、同じように辺りを見渡した。

「さっきまで、ここにいたんですけど……」

と明良は言つて「あ！あんなところに……」と皿を遠くに向けた。監督と菜々子もそちらを向くと、相澤は名刺を配つてゐる最中だつた。

3人は笑つた。

「さすがに商売上手だね。」

監督が笑つた。明良は「監督に挨拶もしていませんのに、すいません」と頭を下げた。

「構わないよ。社長はあれぐらいでなきや。」

監督は笑いながら言つた。

その後、2、3言葉を交わして、監督は次のテーブルへ移動した。

明良と菜々子はテーブルに向いて、ほつとした表情を交わした。

「監督、テーブル全部回るの大変だろ？」「

「そうね。でもお元気な方だから……。」

明良はうなずいて、自分のグラスを取つた。グレープジュースであることを確認して、飲んだ。

「ねえ……明良さん……相澤さん、呼びもどした方がよくなっい？」

菜々子が自分のワインを持って、明良に振り返った途端、明良が崩れ落ちた。

「明良さん……？」

菜々子が驚いて、畳倒していく明良の体をみすつた。

「明良さん……？」

周りのゲストがびっくりして、明良の傍へしゃがみこんだ。そして

「誰か救急車を呼べ！」と口々に言つた。

相澤がその騒ぎで気付き、じきりに駆け寄ってきた。

明良の息が荒い。意識はなによつである。

「酒を飲んだのか……？」

「……」のジユースを……」

その相澤の言葉に、菜々子は首を振つた。

そう言つて、テーブルの上のカシップをさした。まだ半分残っているが、確かにジユース用のタンブラーに紫色の飲み物が入つている。

その時、パンツスーツの女性が駆け寄ってきた。

「救急車じゃ間に合わない！早く顔を洗浄しなきゃ……」

そう言つて「鎌本！」と後ろを向いて声を上げた。「はい……」とい

う返事と共に、体格のいい男性が、明良の体を横抱きにして抱きあげた。周囲が驚きの声をあげた。

相澤と菜々子が2人について一緒に走り出した。

…

青い顔をして呆然としている少年に、1人の男がすっと近づいた。少年が男を見上げると、男は明良が飲んだジュースの入ったタンブラーを持ち上げた。

「君だね。このジュースにワインを入れたのは。」

少年は思わず首を振った。

「しかし、ずっとあの夫婦の傍にいたのは君だけだよ。」

「…」

「このテーブルにある全てのグラスの指紋を取ればわかるんだけどね。任意だが、君の指紋も取らせてもらえるかな？」

男はそう言つて、タンブラーをテーブルに下ろすと、胸ポケットから黒い何かを取りだして、開いた。

「…」

警察バッジだった。金色のバッジが少年の目に飛び込んできた。

「これも任意だが、ちょっと話を聞かせてもらおうかな。」

少年はその場に凍りついたように動かなかつた。

……

会場のホテルの一室のベッドに明良は寝かされていた。胸元は開かれ、呼吸も落ち着いていた。胃の洗浄が早かつたおかげで、救急車には乗らずに済んだのだ。菜々子が明良の濡れた髪をタオルで拭つてやっている。

明良を助けたパンツスーツの若い女性は、この近辺を所轄している署の監察医で「鍋島」といった。一緒にいた「鎌本」というのは、捜査一課の刑事だと言つ。

「おかげで助かりました。」

菜々子が目を腫らしたまま、2人に頭を下げた。横で相澤も一緒に頭を下げている。

「いえ…。これが仕事みたいなものですから。」

鍋島がそう言つて微笑んだ。心中では（北条明良の体に触れた）などと喜んでいる。

「今日はお仕事で来られていたんですか？」

相澤が2人に尋ねた。

「いえ、監督とはちょっとした知り合いだったもので…。パーティーに呼んでいただいたんですよ。」

「そうでしたか…。それは申し訳ないです。お仕事でもないのに

…」

鍋島と鎌本は首を振った。

その時、明良が田を覚ました。

「明良さん…」

菜々子が先に氣付いて、明良の胸に手を置いた。

「…やつぱり倒れてしましましたか…」

明良がそう言って、頭に手を乗せた。明良自身は香水の匂いでやら
れたと思つてゐる。

「違つの、明良さん。たぶん、お酒を飲んじゃつたの。」

「…?え?…」

明良は体を起こした。あわてて体を抑える菜々子に「大丈夫だから」と言つて、座りなおし、鍋島達を見た。

「(?)気分はいかがですか?」

鍋島が少し頬を染めながら、明良に尋ねた。

「(?)の方たちが助けてくれたの。」

菜々子が涙ぐみながら言つた。

「…やつでしたか!…すいません。」迷惑をおかけしてしまつて

…

明良がそう言つて、鍋島の手を取り握つた。

鍋島は電流が走ったよつて、体を硬直させた。

「いっいいえ！……」れも任務なので…」

「任務？」

相澤が「警察署の監察医さんだつてわ。」と言つた。

「そうですか…。」

明良の見開いた目で見つめられた鍋島は（今度は私が倒れるかも）と思つたくらい、緊張していた。

「でも…すいません。こんな時にひづきのもおかしいんですけど…」

相澤が少し笑いを堪えるような表情で言つた。

「？」

全員が相澤を見た。

「鍋島と鎌本つて…なんか笑えるんですけど…」

鍋島達は「ああ」と言つて、お互に顔を見合させて笑つた。

「よく言われるんですよ。」「おなべ」と「おかま」つてね。」

その鍋島の言葉に、全員が笑つた。菜々子も涙ぐみながら笑つている。

「それも、上司が「ノーマル」と言つましてね。」

と、鍋島が言つと、鍋島の遠く後ろにあるドアが開いて、男と少年が入ってきた。

「誰が、ノーマルだ。」

男がいきなりそう言つたので、相澤達が笑つてしまつた。

「捜査一課の「能田」と言います。」

男がそう名乗つて、頭を下げた。

明良達は頭を下げた。相澤などは、必死に笑いをこらえている。

「北条さんのグラスにワインを入れた犯人をお連れしましたよ。」

能田はそう言つて、後ろにいる少年の背中に手をまわして、前へ押した。

5・6歩前へ出て、少年がうなだれている。菜々子が怒ったように、少年に背を向けた。

「おまえが……！」

相澤はこの少年がアイドルだということを知つてゐるよつである。

「ほんのいたずら心でやつたそつです。北条さんが特異体質だとは全く知らなかつたそつで……」

能田がそつと言つと、相澤は少年の前へ近づいた。少年は思わず後ずさりした。

その少年を逃がすまいと、相澤は少年の胸ぐらを掴んだ。

「先輩！」

明良がベッドから降りようとしたら、菜々子に抑えられた。

「お前な……いたずらにも程があるぞ……」いつが死んだら、どうするつもりだつたんだ……」

「先輩……知らなかつたんですから……」

「知らなかつたにしる、普通、飲めない人のグラスにアルコールを入れたりするか！？」

本当は相澤を止めないといけないのだが、刑事達は黙つて見ている。それぐらいはさせてやれという様子である。

「『めんなさい』」

「『めんですむか！』下座して、明良に謝れ！」

「先輩……やめて下せ……」

菜々子が自分の胸に抱きつくようにしているため、明良は立ち上がりにも立ち上がれなかつた。

「君……僕は『うして助かったから、今回は許します。でも、一度と二度と二度同じことをやらないと約束して欲しい。』

明良はそう少年に言つた。

少年は『くつとうなずいた。明良がほつとした表情をした。

「うなづくだけか！？謝れ！」

相澤が胸ぐらを掴んだまま言つた。

「先輩！手を離してください！」

相澤は明良にやつされ、しぶしぶ手を離した。解放された少年の田からぽりぽりと涙がこぼれた。

「「」みんなさー… もうしません。」

泣き声でやう謝る少年に、明良は微笑んだ。

「もう帰つていこよ。」

明良がそつ言つと、能田が後ろから少年の腕を取つた。それを見た明良が慌てて言つた。

「あの… 彼は何か罪に問われるのですか？」

「ああ、いえ。北条さんが許したんですから、我々には出番があります。」

明良がほつとした表情をした。

能田が少年に「行くぞ」と言って、腕を引いた。

少年は、菜々子の後ろ姿を見た。首筋が小刻みに震えている。

菜々子は、最後まで少年に振りかえることはなかつた。

……

少年と能田が出て行つた後、明良は自分の胸に寄り添つて泣いてい る妻の体をそつと離した。

「菜々子さん、もう泣きやんで下れい。」

鍋島のジョークのおかげでやつと笑顔を見せていたのに、少年の出現でまた菜々子の機嫌が悪くなってしまっている。

「笑つて…菜々子さん。ねつ。」

明良がそう言つて、菜々子の唇に軽いキスをした。

それを見た、鍋島と鎌本はびっくりしている。

相澤が慌てて、明良達を隠すようにして、鍋島達の前へ進み出た。

「すいませんね。こいつらいつもこんな感じで…。後は若い2人に任せて出ましょうか。」

お見合いの仲人のようなことを言つて、相澤は鍋島達を連れて部屋を出た。

……

部屋を出た相澤達は、パーティー会場へ向かった。

「ああ、いいなあ…。」

鍋島がうつとりとした顔でそう言つので、相澤と鎌本が不思議そうな表情で鍋島を見た。

「明良さんと菜々子さんのラブラブぶりですよー…。田那さんは、ああいう風に、さわやかにラブラブできる人がいいなあ…」
「鍋島先輩自身がさわやかじゃなきゃ、無理じゃないですか?」
「私さわやかじゃないっての?」

「自分の胸に手を当てる、よく考えて下さい。」

鎌本はそう言つと、思わず吹き出している相澤に「失礼します」と頭を下げる、走り出した。

鍋島も相澤に頭を下げ「鎌本！」と叫んで追いかけた。

「署に帰つたら覚えておけ！注射してやる……！」

相澤はその2人を見送りながら笑つた。

その時、能田が角から姿を現した。

そして走り去る2人を見て、眉をひそめ、相澤に苦笑して見せた。

「刑事さんも最近はコントやるんですね。」

相澤がそう言つと、能田が笑つた。

「お見苦しいところをお見せしまして。」

「いえ。ガチガチな刑事さんよりはいいですよ。」

相澤がそう言つて「あ、そうだ」と名刺入れを胸ポケットから出した。

そして、能田に名刺を差し出した。

「私、芸能プロダクションをやっています「相澤勵」と言います。またお世話になることがあるかもしれません。」

「これは、じ丁寧に。」

能田も自分の名刺を出して、お互い交換した。そして肩を並べてパーティー会場へ向かった。

「相澤さんと北条さんはアイドルコンサートを組まれていましたよね。よくテレビであなた方を見ていました。」

「ありがとうございます。もう遠い昔のようですが…。」

「実は北条明良さんがデビューした頃に、命を狙われて刺された事件がありましたね。その時、私が担当になつたんです。」

「ああ！あの時は僕は明良とは知り合っていなかつたですが、その話は知っています。… そうでしたか…。」

「あの時も、北条さんは被害届を出さず犯人を許していた。… 確か、彼はまだ20歳前だったと思うんですが…。」

「ええ。あいつのデビューは確か18でしたね。」

「若いのに、できた子だと思いましたよ。ようじくお伝えください。」

「ええ、必ず伝えます。」

相澤が言った。

……

「だからだな、明良。」

メリセセンジャーの向こうから、明良は相澤に怒りをもっていった。

「……でもかしいでも、菜々子さんとああするから、今回のよつなことになるんだ。」

「…すいません。」

明良は縮こまつている。

「場所をわきまえて、行動するよつよ。」

「はい。」

「わかれば、よろしい。」

明良はただただ頭を下げている。

「あ、それで。あの能田つて刑事さん。お前が命を狙われて刺された事件の担当だつたらしいよ。」

「えつー?あの刑事さんですか!」

「お前のことを「できた人だ」とほめてたよ。」

「…そうでしたか…。」

明良は何か感慨深げに、下を向いている。

「よかつたら、あのおなべとおかまと一緒に、食事に行きましょうつだつて。」

「先輩、おなべとおかまつて…」

「だつて、それノーマルさんが言つたんだもん。」

明良が大笑いした。

「能田さんですね。」

「ああ、そう言へば、まうだ。」

2人は笑った。

「それで、菜々子ちゃんの『機嫌は直つたかい?』

「大丈夫です。パーティーは遠慮させていただきましたが、家に帰つてから落ち着きました。」

「また家に帰つてラブラブしてたんだろ。」

「…。」

明良が顔を赤らめた。

「ま、家じゃ、俺は何も文句言えんな。今度は俺がお前のジュースにワイン入れるかもしれないから、気をつけろよ。」

「先輩！！」

相澤の笑い声と一緒にメッセンジャーが切られた。

(終)

再会

捜査一課 能田班の部屋 -

班長席に能田が座つて資料を読んでいた。

「あー…田がかすむな。」

前の席でパソコンを操作している、監察医の鍋島が「老眼ですかー？」と振り向かずに言った。

「うむむ。私はまだ35だ。」

と能田が言い返した。

「それより、監察医のお前がなんでここにいるんだ。自分の部署へ戻れ。」

「だって、ネットできなんいんだもん。」

「つむは、ネットカフェか！」

その能田の言葉に、鍋島は思わず笑つた。

「おかまはどう行つた？」

「？…まあ？」

鍋島はあたりを見渡した。

「誰がおかまよー・鎌本でしょー!つー!？」

その裏声と同時に、鎌本が部屋へ入ってきた。

「やめてそれ。もう飽きた。次からは別バージョン考えておいで。」

鍋島が言った。鎌本は椅子に座り、真面目に悩みだした。

「おこ、おなべ。」

「なあ」「？」

鎌本が答えた。

「おかまじやなくて、おなべの方。」

「なんですか？」

鍋島が答えた。これもお決まりだ。

「お前、友達大丈夫か？」

「…ああ…落ち着いたとは思ひんですが…」

友達とは、先日、彼氏に振られて、自殺未遂をした舞のことだった。といつても、大した怪我じゃない。

たまたま、鍋島が訪れたので、軽い手首の傷で済んだのだった。

「しばりぐく様子を見といてやった方がいいんじゃないかな?」「かといって、四六時中一緒にいることもできませんしね。」「まあそうだな…」

その時、鍋島の携帯がなった。

「…舞からメール…」

能田が資料から田を離して、鍋島を見た。

「…なんだか…遺書のよつな…」

その鍋島のつぶやきに、能田が「行つて来い」と言った。鍋島はためらつてこる。

「でも…個人的なことですし…」

「そんなこと言つてる場合か！ 鎌本、バイク出せ。」

「はい！」

鎌本が部屋を飛び出した。鍋島は能田に頭を下げて、後を追つた。

・・・・・

鍋島達は、舞の家についた。鍵は開け放しになつていた。
飛び込んだが、誰もいない。

「どうこう」と？

鍋島が息を切らしながら、頭の中を整理しようとした。
鎌本もどうすればいいかわからない。

その時、鍋島の携帯がなつた。慌てて開くと、能田からだつた。

「相澤プロダクションへ行け！ 舞かどうかわからないが、刃物を持った女の子が入つたつて相澤社長から電話が…」
「相澤プロダクション！？…どうしてそんなと…」…

鎌本が驚いている。鍋島は部屋を飛び出した。鎌本も後を追つた。

相澤プロダクションのビルの前に、鎌本はバイクを止めた。警察も救急車も来ていない。

鍋島は不審に思つたが、バイクの後部座席から飛び降りて、中へ入つて行つた。

「……北条さん！」

鍋島が驚いて、思わず声をあげた。明良が鍋島を見て一瞬微笑んだが、すぐに顔をゆがめた。

明良の手首にタオルが巻かれている。しかしそのタオルは血だらけになつっていた。相澤が新しいタオルを上から巻きながら「車はまだか！」と叫んでいる。

「舞が！？…舞がやつたんですか！？」

「あの子は舞つて言うんですね。」

明良が痛みを堪えながら言った。
舞は、警備員に押さえられていた。

「舞！？」

鍋島が舞に近寄つた。

「あんた、どうして北条さんを！？」

「違うの！あの人を刺そとしたんじゃないの！」

「！？」

舞がそう言つて暴れだしたので、警備員達が必死に抑えた。

鎌本は、明良にソファーに寝るように指示している。

「心臓の方を下にして下下さい。でないと出血が収まりません。」

明良はうなずいた。そして鎌本に支えられて体を横たえた。明良の息遣いが荒くなっている。

「救急車遅いな…」

鎌本がそつ砾くと、相澤が首を振つて言つた。

「呼んでません。」

「呼んでない！？」

その時、車が来たと事務員が走つてきた。
相澤が鎌本に言つた。

「とりあえず、明良を病院へ連れて行きます。お話は後でも構いませんか？」

「それは構いませんが、どうして救急車を呼ばなかつたんですか？」
「いや、明良がね。大げさにしない方がいいんじゃないかつて言つものですから…。それで能田さんにお電話したんですね。」

明良が体を起こした。鎌本があわてて体を支えた。「すいません」と明良は言い立ち上がつた。

「明良…歩けるか？がんばれ…」

受付嬢と相澤に支えられながら、明良はビル前に用意された車に歩き出した。

「あの子、行かせないで！」

舞が暴れながら、明良を車に乗せようとしている受付嬢を指さして言つた。

「あの子が私の彼を取つたのよー！」

「…？」

受付嬢は驚いた表情で舞を見た。舞の言葉を聞いた相澤は「一緒に乗れ」と言つた。受付嬢はうなずいて、明良の後に乗り込んだ。

相澤は助手席に乗り、運転手を促した。舞が叫ぶ中、車は走り去つて行つた。

・・・・・

舞は相澤プロダクションの会議室に、警備員と鍋島、鎌本と一緒にいた。

しきりに泣いている。

「あんた…なんてことしたの…。あの受付の人を殺そつとでも思つたの？」

舞はうなずいた。

「それで、一緒に死のうと思つたの。」

鍋島が、頭を抱えた。

「北条さんを刺したのはどうして？」

「私…何もないような様子で、このビルに入ったの。そしたら入口のところで、あの北条って人が通りすがりに、私に何か呼びかけたの…。私がびっくりして返事をしたら、そのポケットに隠しているのは何？って聞いたの。」

「！？」

その時、舞は上着のポケットに小さな果物用ナイフを隠していた。明良は、そのポケットの膨らみ具合からそれに気づいたらしかった。舞は咄嗟にそのナイフを取り出して、受付嬢の方へ向かおうとしたが…。

「あの人…が、私の腕を掴もうとしたから、咄嗟に腕を振つたら、あの人…の手首にナイフが食い込んだのがわかつて…。」

鍋島は、手を覆つた。

「それなのにあの人、すごい力で私の腕を抑えて…。そしたら、警備員の人…が来て…。」

舞がそこで黙り込んだ。

「…あんな大怪我負つて、救急車も警察も呼ばないなんて…」

鍋島が呟くように言つた。

「…北条さんの心遣いには悪いけど…あんたには自分のした事への責任をとつてもらわなきゃ。」

鍋島がそう言って鎌本を見た。鎌本はうなずいて手錠を出し、舞の

手に掛けた。

……

翌日、鍋島と能田が相澤プロダクションを訪れた。

受付嬢が、少しつつむき加減に、鍋島達を副社長室に案内した。

「あの子の事、気にしないでね。」

鍋島が、そつと受付嬢の背にさそやくと、受付嬢が小さくなづいたのがわかった。

受付嬢は副社長室のドアをノックした。

明良の「はい」という声がした。

受付嬢は少し涙声で「能田様と鍋島様がお見えです。」と言った。

「ああ、どうぞ。」

その元気な声に、能田達はほつとした表情をした。そして受付嬢がドアを開けた。

明良が立つて待っていた。そして2人に頭を下げた。

「わざわざありがとうございます。どうぞ。」

明良はそう言って、来客用のソファーを右手で指した。左手に包帯を巻いている。その手が少し青白く見えた。

それを見た鍋島の胸が、ずきりと痛んだ。

2人は、明良に頭を下げて、勧められるまま椅子に座った。

「傷はござりますか？」

能田が心配そうに尋ねた。

「大丈夫です。縫った針の数は多いのですが。」

「本当にごめんなさい…」

「鍋島さんがどうして謝るんです？」

明良が微笑んで言った。しかし、ふと表情を暗くした。

「…あの子は…結局逮捕になつたんですね。」

「北条さんのお気遣いに背く形になつてしまいましてが、ほつといたら、また何をしでかすかわからないと、鍋島が判断したんです。」

能田が、涙ぐんでいる鍋島の代わりに言った。

「やうですか…鍋島さんも、お辛かつたでしょ…」

明良がやうすく言つて、鍋島を見た。鍋島が涙に言葉を詰まらせながら言つた。

「…本当にすいません。…まさか、こんなことになると想はせなくして…」

「鍋島さん。僕の事は別に構いませんが…」

明良が微笑んで言った。

「あなたの気持ちも、舞さんご云わつてこると想こますよ。」

鍋島は一層、言葉に詰まつた。

能田は（この人は変わらないな…）と思つていた。すると明良がふと思い出したように能田に向いた。

「あの、能田さん…。相澤から聞いたんですが、私が刺された時の事件を担当されていたとか…。」

能田は驚いた表情をしたが、少し照れくわそうに「ええ」と答えた。

「もしかして、あの時病院に事情聴取に来られた刑事さんですか？」

能田が微笑んだ。めったに笑わない能田が微笑んだ顔を見て、鍋島は心中で驚いていた。

「そうです。」

「やつぱりそうですか！」

明良がそう言つて、右手を差し出した。能田も手を出して握手した。

「すいません。あの時もお名前をお聞きしていたとは思つんですが、すっかり失念してしまって…」

明良の言葉に、能田は首を振つた。

「…もう一〇年…いや、一八だったから、一二年ですか…。」

明良が感慨深げに言つた。能田もうなずいた。

「時の立つのは早いもんです。あれから、ずっとあなたが活躍されているのをテレビで見ていましたね。」

「…それは…ありがとうございます。」

明良は少し照れくさそうにした。

「まさか、じうじてお話できるとは思ひませんでしたよ。
「…私もです。」

明良も能田も感慨深げに微笑みあつた。

・・・・・

帰りの車の中で、鍋島は能田から、明良が刺された事件の事を聞いた。

明良はその時まだ18歳だったが、両親も唯一の親族だった姉も亡くして、独りで暮らしていたそうだ。

明良を刺したのは、同じ18の息子を持つ父親で、その息子が大学受験に失敗したことを苦に自殺未遂をし、意識不明の重体となつていた。

犯人はその時、デビューして間もない同じ年の明良の人気が出ていることに逆恨みし、明良のステージを壊すよう細工し、そのため怪我をした明良が入院している病院で命を狙つたりしたのだという。

能田はその時、病院で明良に事情聴取をしている。その時に見た明良の顔は、とても子どもっぽいように見えた。

しかし事情聴取の時点では、明良は犯人がわかつていたらしかった。だが能田はそれを見抜けなかつた。あの時見抜いていたら、もしかすると明良は刺されなくて済んだかもしれない……と能田は今でも悔やんでいる。

が、明良は犯人が捕まるのを望んでいなかつた。その上、明良は刺される前に、匿名でその犯人の意識不明の息子に、花束を贈つてい

る。

「… よくできた子だと思ったよ。」

能田が運転しながら話を続いている。

「明良君が退院した後、犯人は明良君を公園まで追いつめてとうとう刺した。結局、犯人は自首してきたが、明良君の身の上と気持ちを知つて、犯人は警察署で泣き崩れていた…。その姿は今も目の奥に残っているんだ。明良君は刺された瞬間に「姉さん」と言つたんだそうだ。それを聞いた時、私まで涙が出たよ。…もしかすると死んでお姉さんのところへ行くつもりだったのかも知れない。」

鍋島が涙ぐんだ。

「結局、彼は助かった…そして被害届を出さなかつた。…最後までやられたと思ったよ。…そこから私もいろいろ考えるようになつてね。厳しくするばかりが、罪を償わせることにならないんじゃないかつて…。」

鍋島は能田の顔を見た。

「私はテレビで彼の成長する姿を見ていた。引退すると知った時は心配したが、監督のパートナーで、奥さんと一緒にいる彼の元気そうな姿を見た時…彼が生きていてくれてよかつたと、親のように嬉しかつたのを憶えてる。」

鍋島は、本当に嬉しそうにしている能田の顔を見た。普段、表情が変わらないだけに、本当に能田が喜んでいることがわかつた。

「あ、それでなんだ！」

鍋島が突然声を上げたので、能田は眉間にしわを寄せた。

「急に大声を出すな。」

「すいません。監督のパーティーの時、北条さんのグラスにワインを入れた犯人がどうしてわかつたのかな…って、すぐ疑問に思つてたんですけど、ずっと北条さんを見ていたからなんですね。」

「ん…まあ、そうだ。」

「…まあ…つて？」

「実は、奥さんの方を見ていた。」

「！？」

「綺麗な人だなあって、ついつい…そしたら、あの夫婦の傍で、あの少年がうろうろしているからおかしいなと思つていた。でも、まさかワインを入れていたとは思わなかつたがね。明良君が倒れて急性アルコール中毒だつてわかつた時、もしかして…と思って、誘導尋問したんだ。」

「…能田さんって、おかまとかおなべとかが好きじやなかつたでし
たっけ？」

「好きだ。」

能田が真面目に答えるので、鍋島はつに笑つた。

「でも、奥さんに見惚れるといつ」とは…ノーマルですよね。」

「あんな、鍋島。」

「…」鍋島はしまつたと思つた。しかしむづ遲い。

「おかまとおなべがノーマルじやないという考え方自体がおかしいんだ。世の中にはノーマルもアブノーマルもなくつてだな…」

この説教は多分、鍋島の家に着くまで続くだろう。あと一時間は覚悟しなければならない。

鍋島はため息をついた。

(終)

「ただいまー！」

夜8時

-
菜々子が帰ってきた。

「明良さん……菜々子ですよー… 3田ぶつですよー？」

いつもなら明良が出迎えてくれるのに、返事もない。
玄関の電気がついていたので、てっきり明良が先に帰つてきている
と思っていたが…。

「いやだわ……電気つけたまま、仕事にこちけりったのかしら……」

正直、明良も事業が軌道に載つてきたりして、忙しくよううである。

「…おみやげ…買つてきたのに…」

菜々子はドラマの撮影で、伊勢に行つたのだった。

「もうー…仕事なら仕事つて連絡してくれたらいいのに…」

菜々子はそうふとくされながら、リビングに入った。
荷物をソファーに置き、寝室のドアを開けた。
電気をつけて、菜々子は「あやつー…」と声を上げた。

「もおつー…明良さん、いるんじゃないー…」

明良が洋服のままで、ベッドに寝ていた。

よつほど疲れているのか、菜々子に気付いていもいない。

「 もう…明良さん…起きてよつ…」

菜々子がそう呟くよつて言つて、明良ははつと目を覚ました。

「 あつ…えつ…あ、すこません。菜々子さん…お帰りなさい…」

明良が飛び起きたよつにして体を起こし、呟つた。

「 ひどーーー！私に気付かないなんて…」

「 んーーーこのところ徹夜が続いて…ごめんな。菜々子さん。」

明良はせつまつて、ベッドから立ち上がつた。
が…急にめまいを起しそしたよつて、その場に座り込んだ。

「 明良さん？」

菜々子が驚いて、明良の背中に手を当つた。

「 …明良さん…体が…」

「 ああ、大丈夫大丈夫…。わざ薬飲んだから、もうすぐ効いてくると思つ。」

明良がそう言つて立ち上がつた。

「 …すいべ熱いじゃない！」

菜々子はその思良の体を、ベッドに押し倒すよつて寝かせた。

「大丈夫だつて！」

「大丈夫じゃないの……」

菜々子はそう言つと、明良の首元に頬を当たた。

「かなり熱い……。明良さん本当にお薬飲んだの？」

「ええ……本当にこれつき……最後の一包を飲んだところなんです。」

明良は特異体質で、市販の薬は漢方薬以外飲めない。熱を出した場合は、熱さましはもちろん、普通の風邪薬すら飲めないので、必ず内科に行って、体质にあつた薬をもらわねばならなかつた。

「とにかく、ベッドに寝てて！」

菜々子は明良の体をベッドに押し倒した。

「菜々子さん……あの……」

「今、起きたら、一週間キス禁止！」

その菜々子の言葉にて、起き上がろうとしていた明良は、あわてて体を横たえた。

「今、氷枕持つてくるから。」

「……はい……」

明良はおとなしくしていろしかなかつた。

……

「えつー!? 明良、熱出したのー?」

携帯の回りで、相澤が言った。

「そうなんです。だから明良さん、しばらく仕事休ませてもらおうと思つて…。」

菜々子が言った。

「それは、もちろん。…薬はあるの? あいつ、市販無理だらう?」「ええ。明日、こいつもお薬をいただいてるお医者様のところに来て、もういちじょうと思つてこませます。」

「菜々子ちゃんは、お仕事は?」

「今、一段落したところなので、大丈夫です。」

「そうか…でも、あんまり明良に近寄るなよ。」

「?…どうして?」

「風邪が遷つたら、菜々子ちゃん、次の仕事取れないだらう?」「…まあ… そうですけど…」

「明日、姉貴行かせるから、菜々子ちゃんは別の部屋で休んでて。」

「…そんな…百合さんに申し訳ないです。」

「しばらく会つてなかつたから喜ぶと思つよ。とにかく菜々子ちゃんは風邪遷されない様にするんだよ。キス禁止ね。」

わざわざ、明良に言ったことと同じことを言われて、菜々子は苦笑した。

……

翌日、百合が本当に来てくれた。

「百合さん、」「めんなさい。…わざわざこじんな。」

「何言つてゐるのー。菜々子さんは休んでてね。昨夜、明良君の傍にいなかつたでしょ、うね？」

「…はい…」

菜々子は明良が心配で、本当は傍にいたかった。

だが、明良が「風邪が遷るといけないから」と、部屋に鍵をかけてしまつていたのだ。

客間があるので、そこで菜々子は寝たが、正直、安心して眠れなかつた。

百合が、寝室のドアをノックして「百合、だけど入れてー」と言つた。すぐに対応して、百合は入つて行つた。

何か菜々子の心に寂しさが募つた。

…

明良の薬を取りに行くのも、百合が許さなかつた。

「病院つて、病氣の巣みたいなものだから、菜々子さんが遷つたら大変。」

と言つて、菜々子を置いて行つてしまつた。

菜々子は、寝室のドアをノックした。

「明良さん? 具合はどう?」

しかし、中から返事はなかつた。眠つてゐるのだろう。

菜々子はドアにもたれて、うなだれた。

……

翌日、菜々子に仕事の電話が入った。

番組対抗のクイズ番組があるという。

菜々子は「別に自分じゃなくてもいい」と言つて、断つた。収録は先だが、何か明良のこと気が気になつて、仕事をする気がなかつたのである。

それを聞いた百合が驚いていた。

「菜々子さん、駄目よ…明良君が逆に怒るんじゃない？」

菜々子ははつとした。

「…でも、もう断つてしまつたし…」

「菜々子さん、気持ちわかるけど、明良君は子どもじゃないから大丈夫よ。菜々子さんは女優のお仕事に集中して。その方が明良君が喜ぶんじゃない？」

「…はい…」

菜々子は寂しげに返事した。

……

その夜、百合が帰つて行つたあと、菜々子は寝室のドアをノックしてみた。

「明良さん、具合はどう?..」

「大丈夫です。」

「

と返事があったが、その後に咳き込んでいる声がした。

「…明良さん！」

「…大丈夫、大丈夫…。菜々子さん、早く寝なきゃ。」

明良の声がかなり嗄れでいるのがわかる。

「明日も仕事はないから、いいのよ。」

「…でも、いつ仕事が入るか分からぬじゃないですか。早く寝て下せ…。」

そこで、また明良が咳き込んだ。

「明良さん…」

「…おやすみ…菜々子さん。」

必死に咳を止めながら、明良が言つた。
菜々子の中で、何かが切れた。

「明良さんのはばかっ…！」

菜々子はそう言つと、傍にある電話台を持ち上げ（もちろん電話は音を立てて落ちてしまつ）、ドアノブに吊りつけた。

大きな音がして、ドアノブが壊れ落ちた。

菜々子がドアを押しあけると、明良がびっくりした表情で「ひりひりを見て、起き上がっている。

「菜々子さん…どうしたんです…」

嘆れた声で明良が言つた。

菜々子は明良の体に抱きついた。

「だめです。風邪が遷つたら…」

「私は、明良さんの妻なのよ…」

「…！」

「みんなして、仕事仕事つて…。私、女優だけど、その前に明良さんの妻なの！北条菜々子なの…！」

「…菜々子さん…」

明良の驚いた表情が、微笑みに変わった。菜々子はそれに気付かないまま、明良の肩に顔を埋めて泣いている。

「なのに…妻なのに…何もできないなんて…」

「菜々子さん、『ごめん…。泣かないでください』」

明良はそつと、菜々子の体を持ち上げて、横抱きするようにして座らせた。

「女優じゃなくとも、やつぱり風邪を遷すわけにはいかないですよ…。」

「…」

菜々子は明良の顔を見つめた。そして、突然明良の首に抱きついて、キスをした。

「…」

明良は一瞬、菜々子の腕を掴んで体を離そうとしたが、すぐに力を

抜いた。

2人はしばらくそのまま離れなかつた。やがて、菜々子の方から唇を離した。

「……これでもう……遭つたわよね。」

「菜々子さん……」

「一緒に寝てもいいわよね?」

明良が笑いながら、菜々子の髪を撫でた。

「負けましたよ、菜々子さん。」

「じゃ、も1回…」

「…」

明良は菜々子に押し倒されるよつとして、再び唇を奪られた。

……

翌朝 - -

百合が寝室のベッドの前に立っていた。

「……明良君…なんでこうなつちやつたの?」

「…すいません。」

体を起こしていいる明良の横で、菜々子が赤い顔をして寝ていた。完全に風邪が遷つてしまつていてる。

「…ドア壊されたので…」

「つこでに言うなら、電話機も壊れてるけど…。でもいい訳にはな

「らなによね？」

11

「とにかく、2人とも治るまで、キス禁止！！」

「え――――?」

明良がそれを言ひて、

「えー、いやないつー。」

百合の雷が落ちた。そしてドアがバタンと閉まった。（鍵はできないが）

菜々子がそつと田を開けて、両手を明良に差し出した。

(終)

明良は、ソファーに座っている菜々子の膝を枕に寝ていた。
そりやつて一緒にテレビを見ていたのだが、菜々子がふと氣付くと、
明良は寝入ってしまつてゐる。

「あらま」

菜々子はさう言ひ、明良の目にかかつてゐる前髪をそつと払つてやつた。

そして「困つたわね。」と呟いた。
ずっとこのままでいるわけにはいかない。

（起こすの可哀想だな…）

最近、明良が副社長をしてゐる「相澤プロダクション」の業績がよくなり、明良も忙しくなつてきている。

別の事務所にいる女優の菜々子との休みが合わず、一緒に食事をする時間もなくなってきた。

今日は久しぶりに、顔を合わせられたところだ。

（このまま寝ちゃおうか。）

菜々子はそう決めると、ソファーのリモコンを取り、ゆっくり背もたれを倒した。電動ソファーは本当に便利だ。
テレビを消し、ライトもリモコンですべて消した。

明良の心地よさが寝息が、闇の中に静かに響いてゐる。

(仕事…辞めようかなあー。家にこもって、ゆっくりしてやつたいし。)

菜々子は別に女優の仕事に固執していないが、明良が辞めるなど言ひ。相澤プロダクションに俳優部門を作るところ案も、今のところお預けのようだ。

「あれ?」

明良の声がした。目を覚ましたりして。

「菜々子さん?」

「ん~?」

「ライトつけ。」

「んふふ。このままでいいじゃな~。」

「よこしょ。」

「わづ…。」

膝に重みがなくなり、明良が起き上がったのを感じた。

そして唇に何か温もりを感じた。明良が口づけているらしい。

唇が離れたのを感じて、くすくすと笑しながら菜々子が言った。

そして、傍に置いていたライトのリモコンを探り取つて、ライトをつけた。

一瞬、まぶしや光がくらんだ。

「あー…寝ちゃついたんだ…」

明良が頭を抱えるよつとして、言った。

「どうする？シャワー浴びて、もつ遍る？」

「ん…シャワーは朝にするよ。着替えて寝る。」

「明日、何時に起きるの？」

「6時。」

「早いのね。」

「9時に女の子をスタジオに送つてやらなきゃならないんだ。その前に、先輩との打ち合わせがあるし…」

「副社長の明良さんが送るの？その子マネージャーは？」

「一応つけるけど、時々、本人の希望とか悩みとか聞いてやらなくちゃならないからね。」

「それこそマネージャーでいいじゃない。」

「マネージャーを介すと、マネージャーの都合のいい話しか、僕らに届かないから。だから、時々こいつをつけて直接送り迎えるんだ。」

「相澤さんもするの？」

「いや、これは副社長の仕事。」

「…心配だわ…」

「…心配だわ…」

明良は、ふと菜々子に向いた。

「何が？」

「浮気したら嫌よ。」

明良が笑った。

「するわけないでしょ。」

明良はやつぱり、また菜々子にチュッとキスをした。そして立ち上がって伸びをすると寝室に向かつて行つた。

(明良さんより、その女の子達が明良さんに惚れないか心配なんだ
けどなー…)

菜々子はさう思いながら、立ち上がりて寝室に向かった。

…

すぐには菜々子の不安は的中した。

翌日、明良が夜10時頃になって帰ってきた。「ただいま」という声もないのに、テレビを見ていた菜々子は気づかずに入った。ただ、廊下の方で足音が聞こえ、夫が洗面所に行つたのを感じた。

「明良さん?」

菜々子があわててリビングから出て、洗面所に向かった。明良が顔を洗っている。そして、コップに水を入れると口に含んでゆすいでいる。

「どうしたの? 明良さん。…ただいまも言わないで。」

水を吐いて、タオルで顔を拭っている明良の背に菜々子が言った。すると明良が突然菜々子の体を横抱きにして、寝室へ向かった。

「うよ、ちゅうと、明良さん?」

明良は何も言わずに菜々子の体をベッドに下ろすと、その上からかぶさってきた。

…そしてそのまま動かなくなつた。

「明良さん……心がしたの？」

明良は菜々子の上にかぶせたまま、顔を横にして黙つていた。

「何があつたの？」

「キスされました……」

「…?え?」

「…キスされちゃいました……」

菜々子は（あー…やつぱつ…）と思つた。

「誰に?」

「新人の女の子。」

「どいで?」

「車の中です。…仕事が終わって家まで送つたんですけど、見送るために車を降りようとした時にしがみつかれて。」

「…助手席に座らせるからよ。」

明良がびっくりしたように半身を上げた。

「…やうか…」

「もお~…明良さんつけて、やつこいつ抜けてるから…」

そこがまたいいんだけど…と思つたが、それは口に出さなかつた。明良はふたたび体を下ろした。いきなり重みが、菜々子の体にかかりつた。

「あー…僕はほんと…」

「明良さん…あなたは、自分が思つてゐよつもてるんだから、ちゃんと自覚して。」

「はい。」

「今度から、女の子は後部座席に乗せるのよ。」

「…はい。」

明良の返答に菜々子はおかしくなつて笑つた。

「ただ、一つ問題が。」

「どうしたの？」

「写真週刊誌のカメラマンに[写真]を撮られちゃいました。」

「…」

そつちの方が一大事じゃないの…と菜々子は思つた。

「写真週刊誌！？また、すごいタイミングじゃないの…」

「…たぶん、待ち伏せされていたんだと思います。」

「…ということは？その女の子が仕掛けたってわけ？」

「…でしううね。」

「相澤さんに連絡した？」

「はい。」

「相澤さんはなんて？」

「お前が襲つたのかつて…」

菜々子は思わず笑つてしまつた。

「相澤さんもどこまで本気かわからないわね。それで？」

「違いますって言つたら、じゃあ大丈夫だつて。」

「大丈夫？」

「ええ…。例えば、僕の方から体を乗り出していたら「プロダクション副社長、新人アイドルを襲う」みたいな感じでスクープになるけど…」

菜々子は再び笑ってしまった。

「逆に女の子の方が乗り出しているなら、そんなのスクープにもならないって。写真週刊誌も馬鹿じゃないから、そんなの載せたって仕方ないことはわかるはずだって言つんです。」

「…確かにそうね…」

「ただ、ネットの方が怖いと。」

「…！」

「ネットで、画像を細工されて流された方が怖いから、そっちを警戒しようって言つてました。」

「…なるほど…」

「でも、僕と菜々子さんの仲は皆知ってるから、そもそもスクープにはならないよ…って、なぐさめてくれたんですけど…」

菜々子はくすくすと笑った。

「…それよりも僕は…むづかゅっと、菜々子さんに嫉妬されたかったです。」

「…？」

明良のその言葉に、菜々子は声を出して笑ってしまった。

「…めんね。…でも、いちいちそんなことで嫉妬してたら、私の神経が持たないわ。」

「…」

「明良さん？」

明良の返事がない。菜々子は驚いて、明良を抱くよじりして背中を軽く叩いた。

「どうしたの？怒っちゃったの？」

明良の寝息が聞こえた。安心したのか眠りてしまったらしく。

「…なんだ…びっくりした…」

菜々子は微笑んで、枕元にあるライトのリモコンを取り、電気を消した。

・・・・・

翌朝、菜々子は明良と一緒に相澤プロダクションに向かっていた。

「私もどうして一緒にいくの？」

車の中で、菜々子が運転している夫に尋ねた。

「あ…先輩が菜々子さん連れて来いつて言つから…。」

「ふーん？」

プロダクションビルの地下に車を止め、エレベーターに乗り、社長室に向かった。

廊下で稽古着の若い子たちが、明良に挨拶している。

(まあ、結構たくさんいるのね。)

明良は微笑んで挨拶を交わしていたが、ある緊張気味な女の子の顔を見て表情を硬くした。

「… もせよひいざります。」

女の子は丁寧に挨拶していたが、明良は無視して通り過ぎてしまつた。

(あの子ね…。)

驚いたように振り返つてこちらの女の子の顔を見て、菜々子はまじょつとその子が可哀想に思つた。

「ねえ… 明良さん…」

明良の背中に、菜々子は手をかけた。

「何ですか？」
「おとなげないわよ。」「……」

明良は黙つていた。

・・・・・

「菜々子ちゃん、」めんね。急に呼んで。「

相澤が言つた。

「いえ、仕事もなかつたですから…」「どうぞ、座つて。」

相澤に勧められたまま、菜々子はソファーに座った。

明良は菜々子に背を向け、片方のポケットに手を入れたまま、社長席の後ろにある窓のブラインドを開けて外を見ていた。

(まだわざの女の子の事怒つてるのかしり…)

菜々子はやう思つた。

「あのね。菜々子ちゃん。」

「ええ。」

「菜々子ちゃん、ijiのプロダクションの役員にならない?..」

「え?」

菜々子はその相澤の言葉に驚いて、ふと窓の外を見ている夫を見た。夫は外を見たままである。

「…明良はち…反対みたいなんだ…。だつて菜々子ちゃん、女優を辞めなきやならなくなるだろ?..」

「ええ…まあ…今の事務所は辞めなくちゃいけませんものね。」

「ここに俳優部門も作ろつかと思つてゐけど、簡単に作れるもんじやないつて明良は言つんだ。」

「私もそう思います。」

「…でも俺としては、明良と菜々子ちゃんに、一緒に仕事をして欲しいんだ。」

「…相澤さん…」

「昨夜の話聞いた?」

菜々子は思わずクスッと笑つた。

「明良さんが襲われた話?」

「 もうもつ。」

相澤も笑った。

「 実は前々から菜々子ちゃんに来てもらいつつ話してたんだけど、明良はどうしても首を縦に振ってくれない。で、昨夜あんなつたじやない。菜々子ちゃんがうちにこってくれれば、ああいうこともなくなると思うからって、今朝電話で言つたら、明良が直接本人に聞いてみてつて言つからむ。」

（なんだ… 知つて呼んだんじゃない。）

菜々子はそう思つた。夫は背を向けたままだ。

「 ちよつとすぐこまお返事できませんけど… 前向きに考えてみますわ。」

「 ほんと…?」

相澤が嬉しそうに言つた。明良が驚いた表情でこちらに振り返つた。そして慌てたように駆け寄つてきて、相澤の隣の椅子に座つた。

「 菜々子さん…」

「 明良さん…あのね…。こここの役員になるかどうかじゃなくて…私ももう女優に固執していいのよ。」

「 …」

「 明良さんの気持ちちは嬉しいけど…。私もいろいろと限界を感じているの。…明良さんもその気持ちわかつてくれるわよね。」

「 …」

明良は困つたように下を向いた。

帰つての車の中では、明良と菜々子に何か氣まずい空氣が漂つていた。

「…明良さん？」

「何ですか？」

明良は二つともせずに運転してくる。

「…怒らないでよ。」

「…怒つてはないですけど…どうしたらいいのかわからんんです。」

「…」

「菜々子さんが相澤プロダクションに来るしが、本当にここに来なのかどうか…」

「私と一緒に仕事するのは嫌？」

明良は首を振つた。

「そんなことはないですか？」

菜々子はほつとした。

「でも…本当に女優の仕事を辞めていいんですか？」

「いいわ。」

菜々子は即答した。

「正直、役員とかじゃなくて、あなたの秘書がいいの。公私ともに、

あなたのサポートができたからと思つてゐる。」

「！」

明良が驚いた表情で菜々子を見た。が、慌てて進行方向を向いた。
運転中によそ見は危ない。

「そんなにびっくりしないで。…前も言つたけど、私はあなたの妻
なのよ。」

「菜々子さん…」

明良は、微笑みながら感慨深げに小さく首を振つた。少し涙ぐんで
いるよみこ見えた。

・・・・・

・それから1ヶ月後、菜々子は女優を辞めた。「一人の名女優が消
えた」と惜しまれたが、潔い引退に賞賛の声が多く上がつていた。

(終)

覚悟（最終話）

「だから菜々子さんに役員は…」

「務まらないってのか？」

「やつじや、あつません。」

朝 -

相澤と明良が、社長室で言い争っている。

「…今、経営が順調だからいいですが、もし会社に何かあった場合、菜々子さん今まで経営の責任を負わせることになるんです。」「…」

その明良の言葉に、相澤は（やすがだな）と思つた。明良は事務所の倒産を経験している。

「それもやつか…」

相澤が突然素直になつたので、明良は少し拍子抜けした。

「…でもなあ…お前の秘書といつだけでは、経営に参加してもうんないよ。…菜々子さんは、女子のまとめ役になつて欲しいんだ。」「…それはわかりますが…」

「ただの「部長」とかで収めたくないし…。」

「おはよハヤヒコさま。」

ドアがノックされ、菜々子の声がした。

「おはよう! 菜々子ちゃん、入って!」

相澤が言った。

「おはよひざります。」

菜々子が部屋に入ってきて、頭を下げた。

明良が気まずそうに、菜々子を見た。

ちゃんとタクシー代を置いていったが……。

「…おはよう…菜々子さん…」

「明良さん、ひどいわ。…どうして先に行っちゃうの?」

「…すいません…。先輩と話があつて…」

「私を役員にするかしないかって話のことじね。」

「…」

相澤と明良が驚いて菜々子を見た。

「昨夜、明良さんがずっと目を開けたままだったから、気になっていたんだけど…。」

「…お前、寝てないのか?」

相澤が明良に言った。

「…いや、朝方には寝ましたよ。」

明良は菜々子がすっかり寝ていると思っていたので驚いていた。

「すいません、菜々子さんまで起きてたんですね。」

「肌が荒れちゃうわ。」

菜々子は笑つてそう言い、明良の隣に座つた。

「相澤さん……じゃなくて、社長…。私を役員にして下せこます?」
「…」

相澤と明良が驚いて菜々子を見た。

「菜々子さん!」

「明良さん…ずっとあなたに逆らいつもりで悪いんだけビ…。…やつぱりこの方がいいんじゃないかって…」

明良は不安そうな表情で菜々子をじっと見ている。

「あなたは、私にまで経営の責任が及ぶのを恐れているのよね。私もあなたのサポートをえできればいいから秘書でいいと思つていたけど…。何かあつた時はどうせ皆一緒にない?ただの秘書だからつて、独り責任逃れるのは嫌だわ。」

「…ちくわすが菜々子ちゃんだね。」

相澤が感心している。明良は視線を菜々子から足元に向けた。

「明良さん…離婚まで考えててくれたのね。」
「…」

明良は驚いて菜々子の顔を見た。

「離婚だつて…?」

相澤が素つ頓狂な声を出した。

「な、何！？ どういう意味？」

何故か相澤が一番つらたえている。

「違ひのよ、社長。明良さんね、この会社に万一のことがあつたら離婚して私だけ逃がそうとしているの…。」

「…！」

明良はすべてを菜々子に見抜かれて、動搖している。

「離婚届見つけちゃったの… あなたのところだけサインと判があつた。」

「最初はびっくりしたけど、あなたの普段の言動から… そういうことじやないかと思ったの。私が前の事務所を辞めてから、明良さんがぐつすり寝ているところ… 見たことないもの。」

菜々子は明良に微笑みながら言った。

「お前… そんなことまで考えてたのか！」

相澤が言った。

「社長、悪く思わないでね。会社が倒産したことまで考えるなんて縁起悪いけど、明良さんの今までの経験から悪い方に考える癖があると思う。」

相澤が苦笑した。

「そりだな……だからお前を副社長にしたんだけど……。」

「？」

明良と菜々子は不思議そうに相澤を見た。

「……今のお前と一緒にだよ。俺は、最初はお前を巻き込みたくないなかつた。」

「……先輩……」

「お前はお前で人生があるから、俺と一緒に心中させるのはどうかなってや。」

明良は驚いた表情で相澤を見ている。

「ちゅうとは見直したか？」

相澤はそう言って笑つた。明良は下を向いて苦笑した。

「お前は先を見る目がある。少々悲観的だけど、俺が呑氣だから一緒になつたらちゅうどいいこんじゃないかってね。」

菜々子は、微笑んで下を向いている明良を見た。

「私も仲間に入れて、明良さん。」

「菜々子さん……」

明良は菜々子の顔を見て、「ありがと」rippしたわよ。

「言つとくけど、……離婚届はもう破つちやつたわよ。」

「……」

相澤が笑つた。

「よし！ これで菜々子ちゃんは専務に決まりー菜々子ちゃん、後で契約書用意するから、サインお願ひね。」

「はい。」

「役員会議はこれで終わりだ。副社長室に帰つて、2人でキスでもしてくれ。」

「！ 嫌だわ、社長。」

全員で笑つた。

・・・・・

翌日、菜々子に専務室が用意された。

菜々子は、副社長室と一緒にいいと言つたが、女性社員やアイドル達の話を聞いたりするのに、やはり別に部屋を用意した方がいいだろうということになつた。

「…落ち着かないわあ…」

立つたまま辺りを見渡して、菜々子が言つた。

「どー」が？

専務室を訪れた明良が不思議そうに言つた。

「広すぎるのよ。それも1人きりでずっとここにいなければならぬの？」

明良は笑つた。

「別に『ずっと』なくていいですよ。レッスンを観るために行つたり、仕事に同行してあげたり、菜々子さんの思ひ通りにして下せよ。」「なるほど…」

菜々子は嬉しそうに言つた。

「…でも、あなたとの時間…思つたより増えないわね。」

菜々子がそう言つと明良がそつと近寄つて、菜々子に口づけた。

「菜々子ちゃん!」

相澤の声がした。明良と菜々子は慌てて、体を離した。

「菜々子ちゃんの、秘書兼運転手さんが挨拶したいって。」「…?…はい、どうぞ…」

ドアが開いて、相澤の後ろから女性が入ってきた。菜々子はその女性を見て、声を上げた。

「マネージャー…」「菜々子さん…」

2人は思わず手を握り合つている。

明良がまぶしそうに目を細めて微笑んでいる。

「どうして? 事務所辞めちゃつたの?」

「実は、菜々子さんが事務所を辞められてからすぐで私も辞めたんです。」

「…どうして…」

「私も潮時だと思っていたんです。しばらく貯金していたお金でやつくりしていたんですけど、昨日相澤社長からお電話をいただいて…」

…

菜々子は、相澤に感謝の目を向けた。相澤は親指を立てた。

「是非と、すぐに〇〇させていただきました。」

「私もこんなうれしいことはないわ。これからもよろしくね。」

手を握りあつている菜々子達を後にし、明良と相澤は専務室を出た。

・・・・・

「お前の元マネージャー元気か?」

相澤が一緒に副社長室に入つてきて、明良に尋ねた。

「ええ。カナダで第2の人生を満喫してこるようですよ。」

「いいなあ…。俺も社長引退したら、やうじょうかなあ…。」

「先輩。」

「ん?」

「僕は…若い頃から、いつも先輩に守られてばかりで…」

「おいおい…いきなりどうした?」

「…菜々子さんのことまで…フォローしてくれて…」

「…やめろって…」

相澤は、もつ涙している明良に背を向けた。

「…」これからも迷惑をかけると思いますが、よろしくお願ひします。

「

明良は涙声でそういい、その相澤の背に頭を下げた。

「なんだううねえ…お前って…ほつとけなーっていつか…」

相澤は背を向けたまま言った。

「お前の才能に嫉妬したこともあるけど、そんなことも超えて勝手に体が動いちゃうんだよなあ。いうなれば兄弟みたいなもんだ。」

「…先輩…」

明良は驚いた目で相澤を見た。

相澤が振り返った。目が真っ赤になっている。

「まつ…」

「まつ…」

相澤はやうやく明良の肩を呂くと、足早に剣道部室を出て行った。

明良はまた溢れ出る涙を、指で払った。

(終)

覚悟（最終話）（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました！

ちょっと大人になつた明良はいかがでしたでしょうか？

次は「アイプロ！」といつお話で、更に明良が大人（？）になつて登場です。

（ラブ・ラブ・シーンは減りますが（^_^;）

是非、次回もよろしくお願ひいたします（^_^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9331o/>

副社長 北条明良

2011年10月8日05時08分発行